幻界戦線フロントワールド

級長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻界戦線フロントワールド

【Ｎコード】
Ｎ６４８６Ｘ

【作者名】
級長

【あらすじ】
我々が普段目にする漫画やアニメ。それらの正体は何だと思う？
それは異世界からの情報だ。作者の頭に電波が如く、異世界の情報が届き、それが作品になるのだ。我々の住む世界に情報を流す異世界は沢山ある。
今日はその異世界を旅した者達の話をしよう。
世界を廻る冒険の幕が開く。オタクの少年ルーウェンと傭兵の少女ジンが漫画やアニメ、ゲームの世界を守るため戦う爽快な冒険活劇の始まり始まり。あのキャラ達の夢の共演や対決もあるかもね。

プロローグ（前書き）

注意

二次創作が苦手な人はＬＲ同時押しで逃げてください。

時折キャラ崩壊してる奴がいる危険があります。（いろいろ保障できません）

二次とか言ってるくせに妙にオリジナル要素が多い（基本的に物語の根幹）です。

プロローグ

プロローグ

【ポートランド】　ビジネスマンション

ここは交易の世界【ポートランド】。幾多の世界が交わる場所。いくつもある世界はグミシップという乗り物で自由に行き来出来る。例えるなら、宇宙に浮かぶ惑星と惑星の間を旅する様に。

この様に行き来自由なので、世界と世界で争いが起こらないようにする機関や、交易を管理する組織が必要だ。ポートランドは世界をまとめる本拠地となる世界だ。

世界政府の本部や交易管理組織が多数存在する。

交易管理組織【ユニバース】の本部付近に立てられたビジネスマンションに今日も朝日が照り付ける。ここはユニバースで働く者や交易会社に勤める単身赴任のサラリーマン向けに作られたマンションだ。

しかし、その一室に会社員のイメージとは程遠い住人がいた。

「う……ん？」

先ほどまでその住人は１ＬＤＫのシンプルな部屋のベッドで寝息を立てていた。部屋は綺麗にまとめられ、備え付けの家具以外無駄なものはなかった。

住人は幼さの残る少女だった。中学生くらいだろうか。短い茶髪を乱して、金色の瞳はまだ寝ぼけているのか半開きだ。体を起こして、周りを見渡す。何故かベッドには少女の身の丈ほどある刀が置かれていた。

「寝てた？」

少女は目を擦って呟いた。彼女は横になるだけのつもりが、そのまま寝込んでしまったようだ。それは服装からも伺える。

深い緑のジャケットにズボン。どこぞの兵士みたいな服装をしていて、ジャケットは前を開けただけで脱ぎもしていない。
「シャワー……」
少女は呟いて、シャワールームに向かった。

▼

「ふぅ、スッキリした」
数分後、少女はスッキリして戻ってきた。寝ぼけていた表情もキリッとしたものになってる。服も同じデザインのものであるが着替えてる。ジャケットは手に持っていて、普段ジャケットの下に着てるであろう黒いタンクトップからは、健康的な白い肌があらわになっている。
左肩には、目の様な入れ墨が入っている。首にかけたタオルで濡れた髪をおおざっぱに拭き、少女は息をついた。
「おっ邪魔しまーす！　ジン生きてる？」
「なっ、る、ルーアっ！　鍵は閉めたはず！」
息をついた瞬間、扉が開けられ一人の少女が部屋に入る。ルーアという少女曰く、部屋の住人の名前はジン。おおよそ、かわいらしい少女には似合わない名前だった。
ジンは急いでジャケットを羽織った。女の子同士とはいえ、肌を見せるのは恥ずかしいタイプに違いない。
「なぜ？　鍵を閉めたのに……」
ジンは慌ててジャケットの前を閉めながらルーアに聞いた。ルーアは鍵を取り出して、何気なく言った。
「マスターキー」
「管理人権限か」
ルーアはこのマンションの管理人の娘だ。こんなビジネスマンションにジンみたいな同い年の女の子が引っ越してきたのがうれしいのか、なにかと世話を焼いてくる。

「で、何の用？」
ジンはそっけなく聞く。別にルーアのことを鬱陶しく感じてるわけではないが、ジンはつい相手を突き放してしまうのだ。
「いや、昨日帰りが遅かったじゃん。大丈夫かなー、って」
「心配は無用だ」
答を聞いたジンが返した瞬間、ベルがけたたましく鳴り響く。ジンは刀をベッドに取りに行った。
「な、何？」
「警報、か？　空港から異世界の生き物が逃げ出したのかもしれない。ルーアはここで、扉に鍵をかけて待ってろ。警報の長さからすると、危険性の高い生物が大群で脱走したかも」
「わ、わかった」
ルーアはジンの言う通りにした。武器を見てわかる通り、ジンはこんな事態が起きた時のためにユニバースに雇われた傭兵だ。
ジンはベルトで刀を背負うと、ベランダに出た。エレベーターも階段も使わず、ベランダから飛び降りるつもりなのだ。
「はっ！」
飛び降りて、地上に難無く着地する。降りた場所はマンションの近くに通う道路だった。道路には既に、脱走したと思われる生物がいた。
「な、ＳＥＥＤ？」
ジンは驚きの声を上げた。ジンが見かけたのは小人のような姿をした、パノンというＳＥＥＤだ。
「ＳＥＥＤ……。『システムオブグラール』で封印されたはずなのに？」
ジンは戸惑いを隠せない。
ＳＥＥＤとは、『システムオブグラール』という世界に現れた侵略者のことだ。封印されたという報告を世界政府は受けていた。しかし、こうしてジンの前にＳＥＥＤはいる。
「せっ！」

数匹がかりでパノンがジンに飛び掛かる。刀を抜いたジンは一刀でそれを切り裂く。
「急がないと、停泊港は大変なことに……」
ジンは刀を仕舞わず、道路を駆け抜けた。

グミシップ停泊港

「なんだったんだ、あれは？」
ジンは呟いた。停泊港までの道に、青いスライムやゴブリンやらクリボーやら、おまけに戦国時代にでもいそうな歩兵軍団など一貫性ゼロな集団に襲われた。返り討ちにしたが、少しダメージを負ってしまった。ＳＥＥＤ以上に戸惑ったせいで、隙が出来てしまったのだ。
停泊港は空港みたいな仕組みで、ポップな宇宙船みたいなデザインのグミシップが停泊してる。仕組みの関係上、当然海の上だ。
滑走路には青い大トカゲのランポスが大量にいて、占拠といった感じだ。ランポスのクーデターみたいだとジンは思った。
「とりあえず、掃除しないと」
ジンは滑走路を駆けて、ランポスを切り伏せていく。時々、ランポスの爪で傷つきながらジンは確実にランポスの死骸を積み上げる。
「貴様がボスか！」
半分ほどランポスを蹴散らしたあと、赤いトサカの大きなボスが姿を現した。この固体をドスランポスと呼ぶ。
「うあっ！」
ドスランポスが飛び掛かり、ジンの左肩を切り裂く。ジンとしては避けたが、昨日の疲労がとれないせいか動きが鈍っていたのだ。ジャケットが裂けて、目の入れ墨が覗く。
（しまった、最近戦い詰めだったからな……。疲れが残ってるのか）
ドスランポスは再び飛び掛かる姿勢をとる。ジンは避けることを

やめて、カウンターを取ることにした。
ドスランポスが飛ぶ。ジンはそれに合わせて前進する。そして、刀を振り上げドスランポスを両断した。
「よし！」
「おやおや、君がジン君かね？」
ドスランポスに勝利したジンに声がかかる。ジンは声がした方を振り向く。不意打ち的に声をかけられたので、ジンは緊迫した表情になった。納めた刀に手をかける。
「誰だ！」
「そう怖い顔しないでよ。強いて言うなら、人は私をしまっちゃうおじさんと呼ぶ」
「しまっちゃうおじさん？」
振り向いた方には、ピンクで茶色い水玉模様の、二足歩行のヒョウがいた。ジンは感じる殺気と名前のギャップに戸惑った。疑問の多い不思議な日だとジンは思った。距離は離れてるので、安易に近づかないようにジンは心掛けた。
「そう、この騒ぎを起こしたのも君を呼び寄せるためさ。私は政府から君を確保するよう言われてる」
「私を、確保？」
しまっちゃうおじさんと名乗る獣の言葉を聞いて、ジンは平静を保てなくなっていた。自分が確保される理由に心当たりがあるのだ。
ジンは左肩を押さえて言った。
「まさか……、【サイクロプスの目】？」
「そうさ。サイクロプスの目を持つからさ」
サイクロプスの目とは、ジンが生まれながらに持つ入れ墨のことだ。これを見ると、大抵の人間がジンを『世界の破壊者』と罵る。ルーアが部屋に入った時、急いでジャケットを羽織ったのもこのためだ。
自分に世話を焼いてくれるルーアがこれを見た時を想像すると、彼女は悲しみで張り裂けそうになる。

「この印がどうした！」
「私も意味はよくわからない。だが、雇われの身である以上、上の命令には逆らえないさ」
ジンの問い掛けに答えた瞬間、しまっちゃうおじさんはジンのすぐ目の前に来ていた。確かに、距離は離れていたはずだ。ジンは常識外れな出来事に、対応できなかった。
「目を持つ子はしまっちゃおうね～」
「うぐっ、あ！」
しまっちゃうおじさんのボディーブローはジンのか細い身体をたやすく吹き飛ばす。ジンはグミシップに激突して止まった。
「か、はっ……！」
ジンは口から大量の血を吐いた。あばらも折れて、息をするのも苦しいくらいだ。
「さて、しぶとい子はしまっちゃおうね～」
「う、ああっ！」
立ち上がれないジンをしまっちゃうおじさんが蹴り飛ばす。ジンは刀を抜くことすら許されなかった。
「トドメ、か」
しまっちゃうおじさんがジンに近寄る。彼女は力無く横たわっており、動かない。
「う、うぅ……」
「丈夫な子もしまっちゃうよ～」
ジンは無抵抗なまま、しまっちゃうおじさんが放った衝撃波に吹き飛ばされる。一撃ごとに上に吹き飛び、地面に激突する前にもう一撃、もう一撃と受ける。
「くあぁ！」
最後に特大の衝撃波を受け、ジンは鈍い音を立てて地面に落ちた。
「そろそろしまっちゃうよ～」
しまっちゃうおじさんがジンに寄り、掴もうとする。ジンは完全に動かなくなっていた。

しかし、ジンをしまっちゃうおじさんが掴む前に空港が揺れた。
「しまった、ポートランドの崩壊が予定より早くなったか！」
しまっちゃうおじさんの顔に動揺の色が浮かぶ。空港の滑走路がひび割れ、グミシップが割れ目に落ちる。
「しまった！　目を持つ者が落ちる！」
ジンもまた、割れ目に引き込まれていった。しまっちゃうおじさんは駆け寄るが、落下に間に合わなかった。
「逃がしたか！　悪運の強い子め！」
しまっちゃうおじさんは悔しそうに地面を踏み鳴らす。その間、空港だけでなくポートランド全体が崩壊していった。

ビジネスマンションでは、ルーアが揺れに堪えながらジンの帰りを待った。不安の表情であるが、目はしっかりとジンが向かった停泊港を見据えていた。
「ジン、大丈夫かな……？」
部屋が斜めに傾く。マンションが割れ目に引き込まれてるのだ。
「ジン……」
ルーアは友人の無事を祈りながら、割れ目にマンションと共に転落した。

▼

この日、世界政府の拠点【ポートランド】は崩壊した。

1　漆黒の騎士（前書き）

世界ガイド

トワイライトタウン

キングダムハーツシリーズに登場する世界。夕暮れの町。現在、王様により世界を失った人々の避難所になっている。

町に路面電車が走り、地下通路も広がる。イベントが行われる広い空き地や時計塔もある。

1　漆黒の騎士

トワイライトタウン　屋敷

ここは常に夕暮れの、煉瓦造りの町、トワイライトタウン。
名所という名所はなく、強いて言えば駅の時計塔くらいしか見るものはない。町中に地下道が通い、町の外れの森には怪しげな屋敷がある。
その屋敷の部屋で、新聞を読む者がいた。赤い装束に身を包み、顔すら赤い包帯で隠した男だ。部屋は書斎みたいなもので、大量の資料が棚や机に置かれている。今、男が座ってる椅子の前にある机にも、資料が大量にある。机の脇に置かれた冷蔵庫が異彩を放つ。
「ふむ。ルーウェンの言う通り、もう新聞やテレビは信用出来ないな。世界間ネットを見るか」
男は新聞を畳むと、ごみ箱に放り投げた。普段からそうやってゴミを捨ててるせいか、最近は百発百中の勢いでごみ箱にシュートできるようになった。新聞がごみ箱に入ると同時に、書斎の扉がノックされる。
「ディズ先生ー。パトロール終わりました」
「そうか。ああ、そうだ。ちょっとわからないことがあるから来てくれないか？」
ディズと呼ばれた男はノックした人間を部屋に呼ぶ。部屋に入れられたのは、黒いフード付きロングコートを着た、銀髪の少年だった。
「ルーウェン。世界間ネットの見方だが……」
「画面に青いｅのマークがありますよね？　それを押して下さい」
「こうか？」
ディズはノートパソコンを開いて、ルーウェンと呼んだ少年の言う通りにｅのマークを押した。しかし、少年が言ったのはクリック

のことで、ディズは画面をタッチして押そうとしている。
ルーウェンはディズの近くまで行き、パソコンを操作して教えた。
「あー。ここにあるこれをこう動かして、こう」
「なるほど」
ディズはようやく理解した。元々頭のいい人間なので、この程度のデジタルデバイトは乗り越えられる。
しばらくネットを見ていたディズだが、あることを思い出したように言った。
「ハネカワが呼んでいたぞ、ルーウェン。なんでも、お前が拾った奴が目を覚ましたとかな」
「羽川さんが？　じゃ、行ってきます」
ルーウェンは書斎を後にした。ディズは机に置かれた資料のうち、表紙にジャンプと書かれた雑誌を取り出しつつルーウェンを見送った。

屋敷　客室

この屋敷にはいくつも客室がある。ディズは主人だが、ルーウェンや先ほど話題に上がった羽川という人物も、基本的に客室を利用して暮らしている。
「羽川さん、呼びました？　おっと、ナミネもいるのか」
ルーウェンはあるノートを持って普段は空いてる客室に入る。そこには、眼鏡にみつあみの優等生スタイルでキメた羽川翼と、白いワンピースに金髪が特徴のナミネがいた。この屋敷は元々ディズとナミネしか住んでなかったが、ある事情により羽川とルーウェンが暮らすことになったのだ。
「ルーウェンくん、来た？」
「来ましたよ。で、そいつの容態は？」
「怪我は大したことないけど、不思議なのは治りが早いことかな？」

羽川は部屋にあるベッドを見た。ベッドには茶髪の少女が寝かされている。傍らの椅子にはナミネが座っている。

「俺的な気掛かりは、コイツの左肩にこのマークがあることだが……。これはなんだ？」

ルーウェンは手にしたノートを羽川に見せた。そこには、目を象ったマークが描かれている。

「黒歴史ノートね。ルーウェンくんがリアルアースの住人なら、世界の情報ってことで納得いくけど」

ルーウェンが見せた黒歴史ノートとは、ルーウェンが故郷の世界、リアルアースで書いた小説の設定だ。あまりに中二臭いので、羽川には黒歴史と呼ばれている。

リアルアースとは、この世界において特殊な立場にある世界である。リアルアースはトワイライトタウン初め、様々な世界の情報を受信する。リアルアースで漫画やアニメと呼ばれるものは、作者がその情報を受けて作ったものだ。

さらにルーウェン達リアルアースの住人は、リアルアースを一歩出ると姿や能力が一変する。これに関しては、ディズも理由がわからない。そもそも、リアルアースという世界の存在すら知らなかったのだ。

「ルーウェンも彼女の住んでた世界はわからない。けど、ソラに繋がる人ではない。それはわかる」

ナミネが口を開いた。ナミネは『ソラとソラに繋がる者の記憶を操る能力』を持つ。彼女がそう言うからには、この少女はソラと無関係ということになる。リアルアースの仕組みから、世界に詳しいルーウェンも少女のことを知らなかった。

「こりゃ、本格的にモブキャラの可能性が出てきたな……」

「あれ？　ルーウェンくん、これ」

ルーウェンが少女をモブキャラ認定したが、黒歴史ノートをめくっていた羽川がなにかを見つけたようだった。

「なんすか羽川さん？」

「多分、その子の名前はジンよ。ノートに書いてある設定と一致する」
「なん……だと……？」
ルーウェンはノートを確認した。名前はジン・クレッシェンド。茶髪に金眼、身の丈ほど長い刀を背負って戦うなどなど、少女の特徴に一致する。拾った時の服装や、壁に立て掛けられた刀が、彼女をジンだと証明していた。
「う……」
「あ、起きた」
「ちょうどいい。本人に聞こう」
話し声が聞こえたのか、少女が目を覚ました。開いた目は金眼だった。初めに話し掛けたのは羽川だ。
「大丈夫？　どこか痛まない？」
「ここは……くっ！」
羽川の言葉に反応した少女は起き上がったが、傷がまだ痛むようだ。脇腹を押さえて苦しそうにした。
「聞きたいことは山ほどあるが、名前だけ今は聞こう。俺はルーウェン・ヴァイサス。こっちの優等生が羽川翼で、こっちはナミネ」
「私は……ジン。ジン・クレッシェンド。ここはどこだ？」
ジンは周りを見渡して、場所を確認する。とりあえず、彼女がジンであることはわかった。
次にジンは自分の状況を確認する。服はパジャマに代えられ、傷の手当がしてある。しかし、傷の手当がされてるという現状がジンをある不安に駆り立てた。
「まさか、見たのか？　目を！」
「ここはトワイライトタウン。目ってのが入れ墨のことをいうなら、見たな」
「っ……！」
ジンの身体が固まる。左肩を押さえて硬直することしかできない。しかし彼女は、そこでふと気が付いた。サイクロプスの目を見た者

は例外なく、彼女を迫害した。けれども今のジンは、目を見られているのにぬくぬくと寝ていられた。これはどういうことだろう。
「見られたくないってなら謝るが……」
「いや、別に構わない」
「そっか」
ルーウェンは謝ったが、ジンは布団を被って寝ることでやり過ごした。下手に目の事情を話して、目の意味がバレてもまずいからだ。
ジンは何故だか全身から力が抜けるような気分だった。妙な安心感があった。いままでは目のことがバレないように気を使って過ごしていた。けれど、今は目のことを気にせず休める。少なくともルーウェン、羽川、ナミネの三人は目の意味を知らない。
（こんなにゆっくり眠れるの、いつ以来だろ）
ジンは重くなったまぶたをそれに逆らわず、閉じた。布団のせいか、温かい気持ちに包まれた。
（そうだ。ジンと暮らしていた頃以来だな）
ジンとは本来、彼女の名前ではない。彼女の恩人の名前だ。そんな大事な人のことを思い、ジンは少しだけ泣いた。
（ルーウェン、翼、ナミネ……か。この三人なら、少しだけ心を許してもいいかな？）
ジンは目がある関係か、人に心を許さない。心を許して親しくなっても、もし目が発覚したらその分辛いだけだ。だけれど、この三人は目の意味を知らない。なら少しだけ、心を許しても構わないかと感じた。
ジンは三人の存在を確認する。そこでふと、あることに気付く。ルーウェンは目を見た。傷は手当てされてた。傷は当然、服の下にもあった。
「っ……！」
ジンは顔が熱くなる感覚を感じつつ、勢いよく起き上がる。そして、壁に立て掛けられた自分の刀まで跳び、それを抜き放つ。抜いた刀をルーウェンの首筋に近づけた。

「見たのか？」
「見たから謝るって言ったよねさっき。まさかの無限ループ？」
ルーウェンは慌てたように言った。言葉からするとルーウェンはジンの台詞の意味を理解出来てないようだ。ジンの言いたいことを察した羽川が、ジンに告げる。
「大丈夫。手当ては私とナミネでしたから、ルーウェンは見てないよ」
「ああ、なんだそうブァ！」
ルーウェンがジンの言いたいことを察した瞬間、ジンが峰でルーウェンの首筋を打つ。ルーウェンは盛大に壁へ吹き飛んだ。
ジンによる、最大級の照れ隠しだった。

数分後

「俺の世界、リアルアースも羽川さんの世界、フェイクテイルズも壊されたわけだが。どうも原因がわからんな」
ジンの強力な照れ隠しを喰らったルーウェンは復活して、状況を説明した。ジンの世界、ポートランド以外にも崩壊した世界はあるようだ。ジンはベッドに座ってそれを聞いていた。
「リアルアースって世界が案外特殊でさ、他の世界と違うみたいなんだ。まず、俺の現在の姿はリアルアースの姿とは違う。リアルアースは世界中の情報を受けとって、それが漫画やアニメになる、とかな」
「リアルアースが崩壊してから2ヶ月。政府からは発表はなにもないの」
ルーウェンの言うことには、リアルアースという世界は特殊らしい。ジンはそういう細かいことはわからないので、ナミネの情報に耳を傾けた。
「政府が？　行政を行うポートランドが崩壊しても、立法に関わる国会は別の世界にあるはず……」

「ポートランドの方は崩壊の理由がわかってるの。ディズさんの言うには、ポートランドには二つの指輪があって、それを何者かが奪う際にミスがあったようね。あの指輪は二つ同時に台座から外す必要がある。片方だけ外すと、もう片方を奪われないように、ポートランドという世界を崩壊させて指輪の所在をくらます」

そのプロセスを無視したからポートランドは崩壊した、と羽川は言う。ジンは指輪の話しを聞いて何かを思い出したように言った。

「そうだ、指輪！　私の首に、鎖で指輪がかかってなかったか？」

「えっと、これ？」

羽川は鎖を通された指輪をジンに差し出す。紅い宝石が散りばめられた、銀の指輪だ。

「よかった、流血のリング……」

「ポートランドの指輪って、そんな感じの奴か？」

大事な物だったらしく指輪が見つかってホッとしたジンにルーウェンが聞く。ルーウェンは自分の右手の薬指に付けた指輪を見せる。黒い宝石でできた盾の付いた、銀の指輪だ。気になったジンは聞いてみた。

「それは？」

「断罪のリング。この指輪の効果はわからないが、なんかすごいってディズが言ってた」

「確か、流血のリングは使用者が流した血の量だけ手にした刃物の切れ味を増すって効果があったな。その指輪はどこから？」

ジンは流血のリングの効果を思い出しつつ、ルーウェンに指輪の出所を聞いた。ルーウェンはあっけらかんと答える。

「昔、誰かからもらった。誰だっけ？」

ルーウェンが答えた瞬間、サイレンらしきものがけたたましく鳴り響いた。

「これって……」

「外敵侵入警報？」

ナミネと羽川がサイレンの意味に気付き、慌てたように言う。

「外敵？」
「このトワイライトタウンには、自分の世界を破壊された人達がたくさん避難してきてる。なかには非戦闘員もいるから、外敵は危険なの」
よく意味の分かってないジンに羽川が説明する。放送が現在、外敵に関する情報を流していた。
『トワイライトタウン駅に外敵発生！　姿からして無人遠隔捜査のマシナリーと思われる。至急、戦闘員は……』
放送はそれだけ流すと、いきなり切れた。そして、別の声で放送が入る。
『やあ、君らが抵抗勢力の【漆黒の騎士】だね？　早く目を持つ者を差し出して欲しいな。隠す子はしまっちゃうよ？』
「しまっちゃうって……。あいつ！」
放送を乗っとったのは、しまっちゃうおじさんだった。ジンを倒し、ポートランドを崩壊させた張本人だ。ジンは声ですぐにわかった。
「私が行く。あいつは私だけが狙いだ」
「死ぬ気か？　お前まだ病み上がり……」
ルーウェンの言う通り、ジンの怪我では万全の状態ですら倒せなかったしまっちゃうおじさんに勝てるわけがない。そんな奴と戦うとは、まさに死にに行くようなものだ。
「でも、私は行く！」
ジンは刀を背負い、指輪を鎖で首にかけて部屋を後にした。ルーウェンはやれやれと頭を掻いて、羽川に告げる。
「羽川さん。ロクサス達に駅の敵をやらせてください。ジンは俺が追います」
「わかったわ。ロクサスに伝える」

トワイライトタウン　空き地

トワイライトタウンの中心街、トラム広場の隣にある大きな空き地。そこは時々イベントが催されるくらい広く、何もないのだ。部屋を出たジンはそこにたどり着いた。正直スリッパでは走りづらかったが。

「はぁ、はぁ……。どこにいる！」

「やあ、君がジン君だね？　病み上がりなのに無理する子はしまっちゃうよ？」

「黙っ……れ。私が狙いなら、私だけ狙え！」

肋骨が折れてるせいで息をするだけでも苦しいが、ジンは刀を抜いて言った。

「じゃあ、遠慮なく……」

しまっちゃうおじさんは言うなり、ジンに接近した。そして、容赦なくボディーにパンチを撃ち込む。

「ぐっ……あ！」

「しまっちゃおうね～」

ジンが空き地の壁に激突したのを見届けると、しまっちゃうおじさんは手を振った。それと同時に、しまっちゃうおじさんの後ろの地面から巨大な岩倉がせりあがってきた。

「私のとっておきな岩倉にしまっちゃうからね～」

「な、それ……は」

岩倉の扉が開かれる。その瞬間、凄まじい重力がジンを襲った。

「まずい、吸い込まれ……」

「この岩倉の中は重力が発生しているから、なんでも簡単にしまえちゃうよ～」

ジンの体が浮き上がる。元々小柄というのもあるが、ダメージで力が入らず、その場に踏ん張れないのだ。

「うあっ！」

「しまっちゃうよ～！」

「風車斬り！」

ジンが岩倉に吸い込まれる寸前、何者かがしまっちゃうおじさん

に爆撃に近い斬撃を叩き込んだ。ジンは爆撃に吹き飛ばされ、横に反れたので重力から逃れられた。
斬撃を放った張本人は、上空から空き地に降り立った。当然、岩倉の重力に捕まらない位置だ。
「やれやれ、原作無視もここまでくれば笑い話だ。お前、戦闘要員じゃないだろ作品的に」
「だ、誰だね！　邪魔する子はしまっちゃうよ！」
しまっちゃうおじさんは斬撃で吹き飛ばされ、岩倉の淵に手を掴んでしまわれないように必死だった。
「ルーウェン・ヴァイサス。あと、名前を聞く時は自分から名乗れよしまっちゃうおじさん」
「ルーウェン、お前……」
斬撃を放った張本人、それはルーウェンだった。ルーウェンは背中に剣の鞘を背負い、フードを被っていた。鞘の中身である剣は右手にあった。ルーウェンは漆黒の片手剣をしまっちゃうおじさんに向けて言った。
「お前ら、何が目的だ？　冥土の土産くらいには聞いてやる」
「ぐぬぬ……。我々の目的は八元素のリング。ポートランドにある二つはちょっと失敗したけどしまっちゃったよ～。あと、世界中からエネルギーを集めてるけど、あのお方の考えは私にはよくわからない」
しまっちゃうおじさんは岩倉から出ると、重力に耐えながら答えた。全力でダッシュして、なんとか岩倉にしまわれずにいる。
「さあ、真実を知った子はしまっちゃうよ」
「出来るもんならやってみろ。俺はさっきの風車斬りで足を狙った。岩倉に吸い込まれるのは時間の問題だぜ？」
必死に走るしまっちゃうおじさんに対し、ルーウェンは余裕を見せていた。しまっちゃうおじさんは足を痛めており、走るのも苦しそうだ。
「だが、悪役はここで油断して、主人公に負ける。だが俺は容赦

無しだ！　風車斬り！」
ルーウェンは剣を振る。爆撃に近い斬撃がしまっちゃうおじさんを襲う。しかも、何十発と。ルーウェンは本当に容赦無しだった。
まるでグレネードランチャーを連発されてるかのような爆撃の嵐に、しまっちゃうおじさんは遂に耐えれなくなった。
「う、ぐぁー！」
「原作無視するような子はしまっちゃうよ」
しまっちゃうおじさんは地面から引きはがされ、岩倉に吸い込まれた。ルーウェンは黒いカードを取り出して呟いた。
「そうだ、これも持ってけ」
ルーウェンの投げたカードも、しまっちゃうおじさんと共に吸い込まれる。岩倉は地面に沈んで消えた。

同刻　暗い王座

「来たか。えらく苦戦したものだ」
黒装束で姿がよくわからない男が会議室みたいな部屋で呟いた。円卓が部屋の中央にあり男はそれに資料を並べて、近くの床からせりあがった巨大な岩倉を見た。
「サイクロプスは手に入ったか？」
男が岩倉に話し掛けるも反応がない。岩倉の隙間から滲み出る血を見た男は岩倉を開けた。そこには大量の血液と一枚のカードがあった。
「なんだ。とある世界のらっこが妄想したこの生き物がリアルアース住民のトラウマだと聞いたから具現化させたものを……。まいいさ」
男はカードを拾いあげる。カードは黒くて、そこに白抜きのマークと文字が書いてある。裏には盾と鳥の紋章に英語で『漆黒の騎士団』、表には十字架と英語で『ルーウェン・ヴァイサス』と記されている。

「漆黒の騎士団、ルーウェン・ヴァイサス……か」
男は作戦が失敗したのに面白いと言わんばかりに笑った。そして、両手を見る。左右の手にそれぞれ二つずつリングがはめられている。
「常闇のリングと天光のリングはポートランドから手に入れた。煌炎のリングと水龍のリングはすでに我が手のうち……」
世界を崩壊させた張本人は暗い王座に高笑いを響かせた。

トワイライトタウン　空き地

「さっき投げ込んだカードはこれか……」
ジンはベンチに座り、ルーウェンが岩倉に投げ込んだものと同じカードを見ていた。ルーウェンは応援にきた赤毛の男と話していた。
「ルーウェン、倒したのか？」
「ああ、余裕余裕」
ツンツンした赤毛の男はアクセルというらしく、えらく長身でルーウェンのものとはデザインの違う黒いフード付きコートを着ていた。
「お前、いきなり強くなったな……。この前までストラグルでロクサスはおろかピンツにも勝てなかったのにな」
「雛見沢行った時かな？　そこを境にいきなり腕があがったつうか」
ルーウェンの強さに関して釈然としない内容の話を聞いて、ジンは自分が真面目に修業したことをあほらしく感じた。
ルーウェンは首にかけたロザリオを丁寧に磨いている。コートのせいでジンはルーウェンがロザリオをかけてるなんて気付いてなかった。
「カードの十字架とそのロザリオは何か関係でも？」
「ああ、これは俺の師匠から貰った」
「師匠？」
やはりその強さはよい師匠を持ったからか、とジンは納得した。

一人の自分よりよっぽど訓練の効率がいいと感じたのだ。
「で、このカードの漆黒の騎士団ってなに？」
「それは俺達のチームの名前だ。トワイライトタウンに集まる世界を壊された難民達を守り、この異変を解決するために集まった」
ジンの疑問に答えたのはアクセルだった。
「最近世界中で、『タイガーフォース』を名乗る連中が八元素のリングと『目を持つ者』とやらを狙っている。当面の目的は奴らより先に八元素のリングを得ることだ」
ルーウェンが追加で説明した。タイガーフォースという組織がなんであるかジンには察しがついた。目を持つ者とやらを狙ってたあたり、しまっちゃうおじさんもその一員なんだろう。
漆黒の騎士団。ジンに行く宛てなど無いので、彼女はこの組織に身を置くことに決めた。

2．8月32日（前書き）

世界ガイド
どこかの山奥
『ぼくのなつやすみ』に登場する世界。平凡な昭和の夏休みを楽しめると大人に人気だが8月31日以降の日記を書こうとすると……？

2．8月32日

ジンが漆黒の騎士団に入団して三日目。傷も少し癒えたので彼女は仕事に参加する事にした。今、食堂でルーウェンに仕事の説明をしてもらってるところだ。机が並び、組織の人数に対し広いため全員がいるのに寂しく感じる。

「これがカードだ。敵対組織のメンバーを倒したらこれを置いていけ」

「なんでこんな目立つ真似を？」

ルーウェンから黒いカードの束を貰ったジンは呟いた。傭兵としての発想である。名が売れれば確かにフリーの傭兵なら仕事が増えるし、組織所属の傭兵は名が売れれば存在だけで組織の威厳を高める。ただ、それは傭兵の話。ルーウェン達漆黒の騎士団は傭兵ではなく、単なるタイガーフォースに対するレジスタンスだ。

「警戒されると逆に動きにくいんじゃない？　ユニバースみたいに防衛一方の組織じゃないみたいだし」

「そうかもな。けどさ、俺にはあるポリシーがあるんだよ」

ジンの意見にルーウェンは同意した。しかし、そんな戦略的なものより優先すべき理由が彼にはあるようだ。ジンはわけがわからず考え込んだ。

アクセルが二人の会話に入る。ジンにヒントを出すつもりみたいだ。

「漆黒の騎士団は仕事の関係上、人を殺さなきゃならない時がある。そうだな、これはルーウェンが初めて人を殺した時に考えたシステムだった」

「人を……、殺す？」

ジンが言葉を濁らせる。彼女は傭兵だが、モンスター専門なので人を殺すことはない。人と戦うにしても、やるのは拘束するまでだ。

「正解は、そいつを殺した事に責任を持つって意味だ。復讐なら

ぜひ俺までって。要するに、殺すからには殺される覚悟を持てってことさ」
ルーウェンが正解を言って立ち上がった。仕事には屋敷の裏に止めてあるグミシップで向かう。
「殺される覚悟、か」
ジンはルーウェンの言葉を復唱した。その言葉はどこかで聞き覚えがあったのだ。
『殺していいのは、殺される覚悟のある人間だけだ』
「え……？」
一瞬、ジンの脳裏に声が過ぎった。ちょっと自分の声に似てたが、自分はこんなこと言った覚えはない。
「どうしたの？」
声をかけられたので、ジンは振り向いた。そこにはアクセルと同じ黒いコートを着た黒髪の少女がいた。
「シオン。あれ？　ロクサスは？」
「先にグミシップに乗ってるって。ジンの補佐と、行く世界に興味が出たって」
シオンと呼ばれた少女はロクサスの居場所を答えた。ロクサス、アクセル、シオンの三人は漆黒の騎士団でも、外の世界に行かずトワイライトタウンを警護する役割にある。今回、ロクサスは新人であるジンの補佐のために付き添うことにしたのだ。

グミシップ

「俺の夏休みは、あと七日間で終わる」
「日帰りだ。残念だったな」
グミシップのロビー。その多少広いだけで何もない空間にロクサスとルーウェンがいた。ロクサスは金髪の少年で、普段はアクセルと同じコートを着てるが、今日は白基調の私服だ。ルーウェンと髪色や服装でいい感じに対照的だ。

「海がないのが残念だけどな」
「山奥だからな。今回は異変が起きてるし、遊ぶ余裕ないかもな」
ルーウェンは紙の束をロクサスに渡す。ロクサスはそれを見て驚きの声を上げた。
「え？　夏休みが続いてる？　８月３２日なんてあったか？　うるう年？」
「あー、たしかにうるう年ってなんで８月にもってこないんだろうな」
「４０日も休んで、まだ休むつもり？」
二人の他愛もない会話にジンが割って入る。彼女は確かにルーウェンやロクサスと同い年だが、傭兵であり学校には行ってない。それにジンが働き詰めるのはサイクロプスの目によっていろいろ考えるのを防ぐためだ。身体を動かさないと余計な事を考えてしまうため、なるべく休みをとらないようにしてる。サイクロプスの目で考えるのはどれも辛いことばかりだ。４０日も休んだらストレスで死んでしまうかもしれない。
「それよりルーウェンは、人を殺したことあるの？　アクセルから聞いたけど」
「あるよ。つっても、正確な数に入るか微妙だけどな」
「そう……」
ジンは自分の意識をサイクロプスの目から遠ざけるためにルーウェンに聞いた。朝言ってた、殺される覚悟のことだ。
「あ、もしかしたら殺される覚悟より殺す覚悟の方が大変かもよ」
「早く行こう」
ルーウェンが余計なことを喋る前にジンはグミシップを発進させるべくロビー先端の操縦席に座った。操縦席は椅子とモニターがあるくらいで、あとはハンドルしかない。足元にブレーキとアクセルがあるかもしれない。
グミシップは高速で浮上して、気付けば宇宙のような空間にいた。トワイライトタウンが惑星みたいに見える。

「目的地は？」
「自動操縦だ」
ロクサスの指示通り、モニターを自動操縦モードにして目的地としてインプットされた場所を選択する。ディズはユーモアに欠けるタイプらしく、目的地の名称は『目的地１０月６日』としか書かれてない。
「目的地って結局どこなの？」
「資料がある。それと、世界間ネットも忘れずに」
ルーウェンがジンに資料を渡す。単なる紙の束だが、これが行く世界の情報である。
世界間ネットとは、世界の王である人物が今回の敵、タイガーフォースが世界を跨いだ行動をしてるため世界中で情報を共有できるように作ったのだ。この世界間ネット設置にはリアルアースの住人も関わってるらしい。
「夏休みを楽しめる世界、か。夏休みマニアのロクサスが付いてきたのも頷ける」
ジンは資料を見ながら言った。別にロクサスは夏休みマニアではなく、単に夏休みに未練があるってだけなのだが。
「夏休みがまだ続いてるってどういうこと？」
「さあな。着いてからのお楽しみだ」
ルーウェンはジンの質問をはぐらかしつつ、窓の外を見た。

山奥　獣道

「ここに命樹のリングがある。八元素のリングがあれば、リアルアースを元に戻せると聞いたのだが……」
山奥に一人の少年がいた。中学の夏服らしい服を着た黒髪の少年だ。名前はバン・グローリー。リアルアースの住人だ。
「しかし漆黒の騎士団とはとんでもない奴だな！　殺した相手のところにこんなカード置いときやがって、まるで快楽殺人犯だ！」

バンは黒いカードを取り出した。そのカードにはルーウェン・ヴァイサスという名前と十字架が白抜きで書かれていた。
「そう思うだろクレア！」
「別に……。武器を持って相手を攻撃したら、それは殺されて当然なんじゃない？」
同意を求めたバンの声を、クレアと呼ばれた少女は一蹴した。金髪を伸ばした、赤い目をした少女だ。白い騎士装と鎧を纏っている。手には槍が握られていた。
「まったく、クレアはわかってないな。相手を殺しては意味がない。大事なのはわかりあうことさ」
「相手が殺す気満々だったら無理かもね」
クレアはやれやれとお手上げのポーズをとった。立派な思想ではあるが、実現する力がなければ結局口先だけなのだ。
「あれは、グミシップか？」
バンは空を見上げると走り出した。クレアは一応追い掛けるのだった。

広い邸宅　庭

ジン達が着陸したのは、大きな家の庭先だった。着陸といっても、グミシップは浮上しておりジン達は飛び降りたのだが。
「この家、誰もいないな」
「見ろよロクサス。この家焼き物やってるぜ」
「あ、本当だ。離れに工房がある」
「うわー！　棚が崩れた！　ロクサス、キーブレードだ！」
ルーウェンとロクサスの会話にジンは頭を抱えた。さっきまで人を殺すの覚悟なのと言ってたからシビアな任務が待ってるかと思えばこの始末。本来人の気配がしない建物ほどやばいというが、この二人にはその基本セオリーがわかってないようだ。
「なんの、一文字スラッシュ！」

「キーブレード、必要なかったな」
「あー！　今度は牛小屋に！」
ジンは完全に呆れ、二人を呼び戻すことにした。このままでは奇襲されたら一巻の終わりだ。こんなに緊張感のない戦闘要員をジンは見たことがなかった。ユニバース所属の同僚もプライベートでふざけてこそいれど、仕事の時は連携の為の軽口が精々だ。
「ちょっと、ロクサス、ルーウェン！」
「牛がキレたぁー！　ロクサス、キーブレードだ！」
「なにやってんだ！」
ロクサスとルーウェンが走って戻ってきたと思ったら牛に追い掛けられていた。牛は怒り狂っておさまりそうにない。
ジンもルーウェン達につられて牛に追い掛けられた。横に逸れればよかったが、あまりに突然のことに避けきれなかった。敵襲ならまだしも、味方が牛を怒らせるとは。
「この家は牛も飼ってるのか」
「ルーウェン！　なに遊んでるの！」
「俺が悪いみたいにいうな！」
状況を冷静に分析するロクサスとは対照的にルーウェンとジンは全力で逃げた。牛という生き物はなかなかに早い。プロの傭兵にすら追い付きそうだ。
気付けば家を出て山道にいた。そして、前には人影。
「誰だ？」
「敵か？」
牛に追い掛けられるというマヌケな構図ながら、ロクサスとジンは警戒した。世界を巡るにはグミシップが必要だ。一応、グミシップはすべて王の管理下にあり、漆黒の騎士団にもグミシップの運用状況は伝わる。事前にその手の情報がなかったため敵の、つまりタイガーフォースの可能性を考えたのだ。
「お前がルーウェンか！　この快楽殺人犯め、倒してくれる！」
「面倒臭い中坊だな……。コイツは俺がやろう。お前らは仕事を

続けろ」
人影は中学の夏服を着た人物、バン・グローリーだった。ジンとロクサスは脇に逸れ、牛の追撃を振り切った。
「これ以上命を奪うのをやめろ！」
「やれやれ、お前はなにもわかってない」
「なに……？」
ルーウェンは牛に追われながらバンに向かって走る。
「というわけでくらいやがれ。猛牛アタック！」
そして、飛び上がった。牛は飛んだルーウェンの下をくぐり抜け、バンに激突した。
「ギャアアァァ！」
「悪いな。俺の相手は俺だ」
ルーウェンは声高らかに宣言した。

広い邸宅　子供部屋

「仕事はたしか、原因の調査よね……？」
ジンは仕事をするために着陸した家にとんぼ返りした。仕事とは、今だに八月が続いてるというよくわからない状況を調査することだ。
ベッドと机のある狭い子供部屋をジンは調査していた。そこで彼女は興味深いものを見つけた。絵日記だ。
「なにこれ？　８月６７日？　どうなってるの？」
その絵日記はいろいろと奇妙だった。ベッドに腰をかけて読んでいると、８月３１日以降が奇妙なのだ。いや、この絵日記すべてが奇妙であることにジンは気付いた。
「なにこれ……？　書いたページの上からまた８月３２日以降の日記を？」
その絵日記は何度も同じページに日記を書いたあとがある。辛うじて日にちだけ読み解けたが、それ以外の内容はさっぱりだ。始めのページなど、三回ほど上書きされていた。

「よくわからない」
ジンは絵日記を机に置くと家を出た。家は調べつくした。住人がいない。離れと牛小屋はルーウェンが壊してしまった。もう家にめぼしいものはない。
「スターズ……」
「へ？」
庭に出たジンは声を聞いた。声の方を振り向くと、そこには黒いコートを着た大男がいた。肌が爛れ、所々紫色の触手が覗いている。
「こいつは！」
ジンが知るよしもないが、ルーウェンなら、リアルアースの情報で彼の正体を見抜いたはずである。
「ユニバースのデータバンクにあった、追跡者？」
追跡者ネメシス。ある世界で開発された生物兵器だ。コートにはタイガーフォースとアルファベットで刺繍してあり、タイガーフォースに所属してあることがわかる。
「化け物の相手は私の役目、か」
さっきまで人を殺すのなんだの迷いのあったジンの瞳は、まっすぐにネメシスを見据えた。

山奥　獣道

「何を調べたらいいかも、わからないなんて」
ロクサスは自虐気味に呟いた。夏休みといえば海とばかり考えていたロクサスは、山でやることがわからないのだ。
「あ。あれは？」
ロクサスは目の前を虫が横切ったのに気付いた。大型の甲虫、ヘラクレスオオカブトだ。しかも、羽の部分がなんか白い。
「これは、ヘラクレスリッキーブルーじゃないか！」
ロクサスはカードの絵でしか見たことのない虫を追い掛けることにした。

山奥　町へ下りる道

「何故人を殺す！」

「あっちが殺そうとしたからだ！」

バンとルーウェンは死闘を繰り広げていた。バンの武器は篭手が大型化したナックルだが、ルーウェンと互角だ。下る道のため、相手より高い位置にいることが勝負の鍵だ。牛はバンに殴られ、気絶していた。

「何故むやみに殺す！　無力化するだけでいいはずだ！」

「相手が殺す気ならこっちも殺す気でいかねぇと死ぬんだ！　わかったか中坊！」

「それは甘えだ！」

バンが両手の拳を使うのに対し、ルーウェンは片手剣のみ。手数に差があるはずだが、ルーウェンはバンの攻撃をすべていなしている。実力はルーウェンの方が上だ。

「甘えだと？」

ルーウェンとバンは言い争いながら戦っていた。バンにはルーウェンが戦った相手を殺す理由がわからないのだ。

「そうだ。それは甘えだ、ルーウェン・ヴァイサス！」

「バンとか言ったな……。誰一人殺す覚悟がなくて、なにが守れる？」

二人は手を止めた。ルーウェンが上の方にいる。バンはルーウェンの考えが理解できないとばかりに叫ぶ。

「誰かの犠牲の上に生かされて、その人は嬉しいと思うのか！　俺は誰も殺さず、リアルアースを復活させるためにタイガーフォースに入った！」

「リアルアースの住人、か。やれやれテンプレ批判乙。たいてい犠牲になる奴って、守りたい奴の命を狙ってるんだろ？　なら殺すのが一番そいつを安心させる方法だ。人の命を守るってのは、そん

な甘い発想で出来ることじゃねぇ！」
「この人殺しめ！　そんなのは間違ってる！　敵だった奴も、いつかは仲間になれるかもしれない！　その可能性をお前はみすみす見逃すのか！」
バンにそう言われたルーウェンはというと、やれやれお手上げだと肩を竦めた。
「握り拳とは握手できないさ。今の俺とあんたがそうだ。もしそんな可能性があるなら、戦ってる時にわかる。もう一度聞こうバン・グローリー。お前の目的はなんだ？」
「俺の目的は、なにも奪わず、なにも失わず、リアルアースを取り戻すことだ！」
バンは拳を突き上げ、宣言した。ルーウェンはそれを見下す目で見ていた。
「お前はその目的のためになにを捨てた。俺は捨てた」
「人の命をか！」
「いや、自分の潔白さ。俺には守りたいものがある。今の仲間、羽川さん、ナミネ、ディズ、ロクサス、アクセル、シオン、避難所のみんな、そんでジン。守りたいものは大きくなる一方だ。俺は、それを無くしたくないから、代償を払った。これがその代償だ！」
ルーウェンが歩き出し、バンが身構える。ルーウェンから溢れるほどの闇が流れ出す。
「うっ！　いきなり持病の心臓病がヤバくなったぞ……！　あとは、頼む……。バタリ」
そして、苦しんで倒れた。
「な、なんだ？　おい、大丈夫か！」
バンは今まで戦っていた相手だということを忘れ、ルーウェンに駆け寄る。
しかし、それは罠だった。
「スキあり！」
「ぐあっ！」

ルーウェンはバンが近づくのに合わせて起き上がり、アッパーを決めた。バンは吹き飛び、かなり道の下の方で頭を打って動かなくなった。

「これが俺の代償だ！　正々堂々だの、もう捨てた！　ようは勝ちゃいいのさ！　頭の打ち所が悪かったかな？　死んだだろうし、おいていくか」

ルーウェンは黒いカードをコートから取り出し、バンに投げた。ルーウェンは仕事をするため、家へ戻った。

広い邸宅　庭

「くそっ！　強い……！」

ジンはネメシスに押され気味だった。傷が完治してないこともあり、一挙一足が身体に響く。

自分の攻撃すら傷に響くため、なかなか攻撃を出来ずにいた。そのため、彼女に分の悪い防御中心の戦いになってしまう。ジンの持ち味は（本人は認めたくないが）小柄な身体を生かして高速で敵の懐に潜りこむ攻撃主体の戦闘。傷が原因で速度を出せず、そのスタイルができないのだ。

「どうすれば……」

ジンは考えた。しかし、まともに頭を使って戦ったことのないジンには難しい。考えてるジンの耳に、エンジン音が鳴り響いた。

「ヤッホー、ジン～」

「ルーウェンっ？」

ルーウェンがバイクに乗ってやってきた。バイクはウイリー走行をしており、そのままネメシスにぶつかった。ネメシスはよろけて倒れた。

「今だ！」

困惑するジンにルーウェンの声がかかる。ジンは我に返り、立ち上がろうとするネメシスに駆け寄った。

「流星、」
ネメシスが彼女の姿に気付いた時には、すでに遅かった。ジンは太刀を横に薙ぎながら駆け抜けた。
「極爪！」
ネメシスの身体に一筆書きで星を書いたような切り傷が刻まれる。ネメシスは崩れ、動かなくなった。
「そのバイクどうした？」
「グミシップに積んであったの忘れてた。サラマンダーだ」
ジンはルーウェンのバイクに目を向けた。漆黒の大型バイクである。サラマンダーという名前にはジンも聞き覚えがあった。
「サラマンダーって、グリフォンやフェンリルに並ぶバイクブランドの？」
「まあ、グリフォンみたいなデザイン重視のでくのぼうより速いけどな。オフロードはフェンリルの専門だが、オンロードならサラマンダーだ一番速い。初仕事の後に世界まわって修業しててさ、その時に手に入れた」
「なるほど。私もバイク持ってるが、軍用のバハムートって味気ない奴だな」
「バイクトーク中悪いが、こちらを向いてもらえると助かる」
バイクトークに花を咲かしてる二人に、不意に声がかかる。少女の声で、やたら凛としていて落ち着いている。そこには白い騎士装をまとった金髪の少女がいた。伸びた金髪が夏の風に吹かれ、優雅になびく。
「バンを倒したようだな。なかなかの腕だ。私はクレア・ハーディ。強さを追い求める者だ」
クレアは緑色の、豪華な飾りが付いた厚い本を持っていた。
「君の信念はなかなか見上げたものだ。なにかを守るために、自分の潔白、つまり自らの安全や平穏を率先して捨てる。私程度にはとても追いつけない領域だ。そして、そうした者は強い」
クレアは本の飾りの中央から指輪を取り外した。それは緑の宝石

が付いた、葉を模したデザインのものだった。
「これは命樹のリング。八元素のリングが一つ。これがあればリアルアースが復活したり、フロントワールドって兵器が動いたりするとの話だが、私にそれは関係ない。これを狙って強い奴がたくさん来るってだけで、私は充分だ」
「八元素のリングだと？」
ルーウェンがクレアの長い言葉にようやく入れた。クレアはルーウェンを見つめて言葉を続ける。
「そうだ。この本がこの夏休みが終わらない原因だ。この家の日記帳から思い出を吸い取り、命樹のリングに力を与えていた。ルーウェン・ヴァイサス、これは再会の約束だ。リングが欲しければ私を追い、タイガーフォースに抗え。本来なら今戦いたいところだが、君はすでにバンと戦った。連戦は君が不利になる」
クレアは緑色の本をルーウェンに投げ渡し、ネメシスの足を掴んで引きずっていった。
クレアの姿がなくなると同時に、二人の前に一人の少年が現れた。少年は顔や服の配色がめちゃくちゃで目も当てられない状況だ。
「ルーウェン！　本、見てっ！」
ジンの声を聞き、ルーウェンが渡された本を見た。本は勝手にパラパラとめくれ、文字が溢れだした。文字は光になり山に降り注ぐ。山の緑はたちまち紅葉していく。暑い空気は冷えていった。
「どうなっているの？」
「この本が、一人のガキの妄想を具現化したみたいだな。ディズが言ってたけど、八元素のリングってのは大半が未完成なんだ。この本は多分、命樹のリングを完成させるための装置なんだと思う」
ルーウェンはジンに本を渡しながら、彼女の疑問に答えた。ジンは本の表紙裏を見て呟いた。
「命樹のグリモア。我、人の思い出を得てリングを生むものなり。つまり、思い出がリングの栄養ってこと？」
「多分な。詳しくはディズに聞かないとわからないや」

ルーウェンとジンは、秋の装いとなった山を眺めた。秋の風がジンの頬を撫でる。

思い出。彼女にとっては楽しい思い出よりも悲しい思い出が多い。思い出を栄養にするということがまだ、ジンには理解が出来なかった。

3．ルーウェン・ヴァイサス散る（前書き）

世界ガイド　バロウズ邸

クロックタワーに登場。迷路のように入り組む大邸宅。迷いやすい点とシザーマンに目をつぶればよい物件。つまりわけあり物件。

3．ルーウェン・ヴァイサス散る

トワイライトタウン　屋敷の会議室

「原因がわかった。恐らく命樹のグリモアは焦っていた」
会議室にディズとジン、羽川はいた。先日の任務で見つけた命樹のグリモアが異変を起こした原因がわかったのだ。
「焦ってた？」
「このグリモアは命樹のリングを完成させるための装置に過ぎない。思い出という栄養を得るための消化器官のようなものだ。何らかの理由で命樹のリングの完成が急がれ、栄養をより多く得るために夏休みを続けたと考えるのが妥当だ」
「夏休みって、思い出がたくさん出来るもの。思い出が欲しかったら夏休みを繰り返すのが一番早いわね」
ディズの解説に羽川が付け足す。命樹のリング完成と共にグリモアが夏休みの呪縛を解いたのも納得できる。
「理由はだいたいわかったけど、夏休みってのは思い出を大量に残すものなのか？」
ジンは夏休みをあまり知らず、メカニズムは理解出来たが夏休みの実態を掴めずにいた。
「夏休みってのはそういうもんさ。ま、俺ら受験生は大変なだけだけどな」
「ルーウェンって、『受験生』だったのか？　言葉は知ってるが受験生ってのもよくわからない」
ルーウェンが会議室に入る。手には前回の仕事の報告書がある。
「ああ、高校受験の真っ最中だ。幸い、羽川さんのおかげで学校通うより成績がうなぎ登りだがな」
「高校？　ルーアも時々言ってたっけ」
ジンはポートランドの友人に思いを馳せる。世話焼きで、なにか

と助けられた。今はどこで何をしてるのやら、少しだけ気になっていたところだ。
「ルーウェン。情報が入った。リアルアースの住人が目撃された。この写真だ」
「これは？」
ディズがルーウェンに一枚の写真を見せる。その写真には一人の少女が写っていた。ルーウェンはその写真をまじまじと見て言った。
「こいつ、リアルアースでのクラスメイトじゃないか！」
「え？」
「やはり、か。リアルアースの住人はリアルアースにいた時と姿が違う。が、知り合い同士なら認識可能。トラヴァースタウンでそんな研究結果が出ていたのでな」
「しかも俺の片思いの人じゃないか！」
ディズの解説もそこそこにルーウェンはソワソワしだした。片思いだそうだ。
「今回の仕事は彼女と接触し、避難所に連れて来ることだ。グミシップのメンテナンスが済み次第向かえ」
「了解！」
ルーウェンは走って会議室を出て行った。ジンはなにやら釈然としない気持ちでそれを見ていた。

トワイライトタウン　避難所

ジンは気づくと避難所まで来ていた。ルーアのことを考えていて、知らないうちに着いていたのだ。
町に設置された避難所では今も多くの人々が暮らしている。王様の支援のおかげか生活には困らない段階まで来てるが、被災者の自立など、課題はまだある。マンションみたいなもので、避難所というより仮設住宅に近い。
「初めまして。貴女が新しい漆黒の騎士団メンバー？」

「え、ええ」
避難所の近くにある公園に入るといきなり声をかけられた。声をかけてきたのは金髪の女性だ。羽川と同い年か少し上かもしれない。
「私はヨヨ。よろしく」
「ジン・クレッシェンドだ」
ヨヨとジンは互いに自己紹介した。ヨヨという名前はちょっと耳にしたことがある。どこかの世界の王女だった。
「ルーウェンはどうしてる？　最近あの子、顔見せないから」
「大丈夫だ。生きている」
「そう。ならたまには顔を出すように言っておいて。あの子、かなり無謀なことやるから。貴女も、トリートメントくらいした方がいいかもね」
ヨヨはジンの茶髪に触れて言った。ジンは服装などオシャレをしない。気にかけるのは最低限の身嗜みのみだ。髪は整えているが、実は痛みまくって体以上にボロボロなのだ。
「あ、ああ」
ジンもルーアと同じ空気をヨヨに感じたからか、拒絶は出来なかった。

トワイライトタウン　空き地

「すげぇロクサス！　こんな虫どこで捕まえたんだ？」
「仕事で行った世界で捕まえたんだ」
ロクサスとその友人である少年、ハイネは空き地のベンチに座って話していた。ロクサスの持っている虫かごには、ヘラクレスリッキーブルーが入れられている。
「それよりさ、八元素のリングは見つかった？」
「この前相手に一つ渡った」
そんなネガティブな情報を流しつつ、ロクサスは夕暮れの町を眺めていた。

グミシップ　ロビー

「で、準備出来たと聞いたから来たのに、こいつの浮かれようはなによ」

グミシップに来たジンはルーウェンがやたらソワソワしてるのを目撃した。

「目的地はバロウズ邸、か。一つの世界の、誰の家かなんてよく特定したわね……」

「バロウズ邸はお化けが出るって有名なんだ」

「お、お化け……？」

お化けと聞いた瞬間、ジンの顔色が変わった。お化けとかダメなタイプかもしれない。

「お化けとか苦手か？」

「そ、そんなことはない！」

ジンは必死に否定するも、お化けが嫌いだと顔に書いてあるような状態だ。凶悪モンスターに立ち向かうユニバースの傭兵にも弱点はあるのだ。

「んじゃ、いっちょ行きますか！　バロウズ邸へ！」

ルーウェンはモニターに向かって、自動運転の操作をした。

コントロールルーム

「これが、フロントワールド」

黒装束の男が、中央に大きな羅針盤のようなもののある部屋にいた。部屋は広く、部屋の隅に縁取るように水が流れている。

「リアルアースという結界を得ることで封じられていた最終兵器。リアルアースの住人すら防衛システムの一環に過ぎない、か。封印が解け、姿形の変わったクレア君やルーウェン・ヴァイサスが高い戦闘能力を有するのも理解出来る」

男は羅針盤の淵を指でなぞりながら呟いた。羅針盤にはサイクロプスの目が刻まれている。ジンと関係があるのだろうか。
「そういえばバン君の友人が仇討ちに必死になってたな。バン君は生きてるのに、せっかちな子だ。まあ、ルーウェンがこの程度で負ければそれまでの戦士でしかないということか」
男は羅針盤を見ながら、これからの計画を組んでいく。世界を統一する為の計画を。

バロウズ邸　ロビー

「あ、お客さんみたいよ暁美さん。出るね」
「その必要はないわ」
豪邸というより迷路に近い間取りを持つバロウズ邸。そのシックな佇まいをしたロビーに二人の少女がいた。一人は栗毛のよくいそうな感じの少女。彼女がルーウェンの片思いの人だ。
「またシザーマンを奪いに来た連中かもしれない」
もう一人の少女は長い黒髪をなびかせ、地味な色合いやデザインではあるが魔法少女のような衣装に身を包んでいる。彼女は魔法少女の暁美ほむら。ざっくりいうと現在、バロウズ邸はほむらのものだ。
彼女がバロウズ邸に来た当初はシザーマンがいたが、どうやったのか鋏を奪って樽に押し込めてしまった。魔法少女とは恐ろしい。その後、リアルアースが崩壊してバロウズ邸に行き着いた栗毛の少女を住ませている。
「タイガーフォースの人ですね……。暁美さんに任せる」
栗毛の少女はほむらに来客を任せると、ロビーの奥へ行った。ほむらはゴルフクラブを取り出し、玄関へ向かう。
「ちわー。漆黒の騎士団でーす」
扉の向こうから声がした。ほむらは慎重に声の主を確認した。
「馬鹿ね。そんな怪しげな団体の名前出して開ける人いない」

扉の向こうからは少年の声以外に少女の声も聞こえる。タイガーフォースの連中は今まで、男しか来ていない。女性を連れて来たのだろうか。
「新聞と魔法少女の契約なら間に合ってるわ」
ほむらは漆黒の騎士団と名乗る二人に返事をした。しばらく二人はキョトンとしたように黙った。
「魔法少女？」
「クロックタワーに魔法少女はいなかったな。なら、他の世界から来た奴だな」
（こちらの正体を知らない？）
タイガーフォースとほむらはシザーマンを巡り何度か戦闘した。ただ、人の家に土足で上がり込むタイガーフォースが悪く、ほむら自身はシザーマンなんかいらないと思ってるが。
それなのに扉の向こうの二人はこちらの正体に気付かない。タイガーフォースではないとほむらは判断した。
「入って」
「お、センクス」
ほむらが扉を開けると黒コートで銀髪の少年と、茶髪の少女がいた。少年はほむらの一つ年上くらいだった。さっさと屋敷の奥へ歩いていく少女は同い年だと判断した。
「俺は漆黒の騎士団メンバー、ルーウェン・ヴァイサス。こっちはジン。実は、こいつを探しててな」
ルーウェンと名乗る少年はコートの懐から写真を取り出す。それには栗毛の少女が写っていた。ほむらは思わず驚く。
「メイ……？」
「知ってるのか。メイ、か。この世界じゃその名前なのな。俺はメイと同じ、リアルアースの住人だ」
ルーウェンは事情を説明した。ほむらは少し、彼のここを訪れメイを探した目的に興味が出た。

バロウズ邸　中庭

「一つ、聞きたいことがある」
「なに？」
「リアルアースが崩壊した時の状況」
ほむらとルーウェンがロビーで話し込んでる間、ジンはこっそり屋敷の奥へ向かった。少しでも屋敷の情報が欲しかったのだ。歩くうちに中庭に出て、栗毛の少女メイと会ったのだ。
中庭にはプールがあり、泳げないジンはプールの必要性に疑問を感じたが今は黙殺することにした。
メイは頭を捻ってジンの疑問に答える。
「うーん。いきなり崩壊したから、わからない」
「なら、崩壊の前に異変はなかった？」
「それならあるよ。日本中に大きな建物がたくさん建てられた。新型の発電所だった」
ジンは新型の発電所という言葉に注目した。ルーウェンも同じことを言っている。ディズも『新型の発電所』以外、情報のなさ故仮説しか立ててなかったが、リアルアース崩壊の原因はわかった。いや、もしかしたら羽川やヨヨの住んでた世界の崩壊理由も同じかもしれないとディズは言っていた。
「新型の発電所が、もしも世界からエネルギーを吸い出す施設だとしたら、エネルギーを吸い尽くされて世界は崩壊した、か」
ジンはディズの仮説を呟いた。普段はアイスばかり食べていて、研究者にそぐわない服装をしてるディズだが、研究者としての頭脳は天才的なのだ。それ故、一応ディズの仮説は正しいとジンは考えた。
「タイガーフォースはなんのために世界を……？」
ジンは難しいことを考えるのが苦手だ。クレアがまとめてくれたにも関わらずルーウェンの言った「殺す覚悟と殺される覚悟」のことが理解出来てない。

「あ、あれは？」
しかし、ジンの思考は打ち消された。敵襲があったのだ。
「敵か！」
塀を飛び越えて来たのは、緑色の四角いモンスターだった。シューという音がしており、四角で出来た雪だるまみたいな感じだ。腕はなく、足と思わしき四角は四つついている。そんなモンスターが大量にいた。
「メイは逃げて。こいつら、嫌な予感がする……！」
「わ、わかった」
メイが中庭からいなくなったことを確認すると、ジンは背中の刀を抜いた。

バロウズ邸　ロビー

「こいつら、クリーパー！」
「知ってるの？」
ロビーにいたルーウェンとほむらのもとにも中庭にいたモンスターが現れた。玄関を爆破して侵入したのだ。
「ああ。こいつら爆発するんだ。こんな屋敷リフォームされるぞ！」
ほむらはルーウェンの言葉を聞きながら銃を構えた。魔法少女的な武器ではなく、本物の実銃だ。それでクリーパーの内一匹を仕留める。
「自分の意思でしか爆発しない、撃っても爆発しないのね」
「よし、なら俺が全部斬る！」
「その必要はないわ」
ほむらはクリーパーの性質を確認するとルーウェンの提案を却下しつつ、左腕に丸い盾の様なものを装備した。こちらは色合いが地味だが魔法少女的なアイテムだ。
ほむらは魔法を発動させた。すると、一瞬でクリーパー達は風穴

を開けられて倒れた。
「な、なんだぁ？」
「時間を止めて、その間に全部倒した」
「時間停止能力……？」
ルーウェンは魔法少女としてはこれまた地味で反則レベルな能力に驚いた。ルーウェンとしては盾から光が出て一掃するものだと思っていたのだ。
「さあ、今日こそリアルアース復活の為にシザーマンを渡してもらう！」
タイガーフォースの人間と思われる武装集団がクリーパーの爆破した扉を乗り越えてきた。全員がマシンガンの様な重火器を持っている。
「やれやれまたリア充か。俺としては別にリアルアースに帰れなくてもいいんだが」
「貴様！　バンの言ってた快楽殺人者！」
ルーウェンの言葉に武装集団が反応した。実際、ルーウェンが殺した数は二人に満たないのだが。
「快楽殺人者はどっちだか……。お前ら、そんなたいそうなもん持ってるからどうせ殺されないとか思ってんだろ？」
「当たり前だ！　こんなもん持って、剣に負ける奴いるか！」
ルーウェンの問い掛けに武装集団は即答した。しかし、ルーウェンは嘲笑の目を向けて笑い飛ばす。
「それなら戦術に立つ覚悟は、無い！　では昔話をしよう。俺は漆黒の騎士団に入った当初、サポート要員だった」
ルーウェンは昔話を始めた。剣を抜いて、指揮棒の様にもてあそび、演技がかった仕草をする。
「俺は護身用に銃を隠し持ってたんだがな。ある日トワイライトタウンの避難所が制圧されたんだ。そんで、俺も捕まった。相手はマシンガンを持っていた。今のお前らみたいにな」
「それがどうした？」

ルーウェンの昔話を武装集団はさほど真剣に聞いていなかった。当然である。いきなり戦闘中に昔話を始める人間など正気ではない。

「俺は捕まってるとヤバそうだから、スキを見て反撃したんだ。敵の頭に俺の弾丸が命中して、即死だ。そん時俺は何となく理解した。こんなに武器の性能差があっても、相手が武器を持ってりゃ反撃されて死ぬんだ、って」

「意味がわからん。その時の敵は馬鹿かもしれんが、俺達は違う。そこまで馬鹿ではない。スキなど見せん」

「いいや同じだね。圧倒的な人数差と武装差があるから自分だけは死なないと思ってやがる。そんな奴に武器を持つ資格も人を傷付ける資格もない……！」

ルーウェンは右手に持った剣を武装集団に向け、首にかけたロザリオを掴んだ。そして、武装集団に確固たる覚悟を持って宣言する。

「ロッソ・ファンタズマ。二度とそんな薄っぺらい覚悟で武器を持てん様に、腕一本貰っていくぜ」

その瞬間、ルーウェンの姿が揺れた。

バロウズ邸　中庭

「うっ……あ」

ジンは中庭に倒れていた。クリーパーの爆発に巻き込まれたのだ。ジンのとった戦法はこうだ。クリーパーを連れて中央のプールに飛び込み、爆発させる。クリーパーは爆発までに全滅させられる数ではなかったが、彼女はユニバースのデータベースからクリーパーの情報を端的に知っていた。結果として爆発のダメージはジンと建物共に半減させれたが、それでも彼女は再起不能レベルのダメージを負ってしまった。屋敷の方はプールの水が無くなった以上の損害は受けてない。

ジンはずぶ濡れで中庭の壁に背中を預けた。こうしていると、昔を思い出す。サイクロプスの目が原因で差別を受けていた頃だ。よ

く雨宿りもろくにできず、雨に打たれて座り込んでいた。
「ジン……私は、まだ、生きて……」
ジンというのは彼女の名前ではない。彼女を拾ってくれた傭兵の名前だ。ジンは恩人の事を思い出して目を閉じた。

5年前　ポートランド郊外

時はしばらく遡る。ポートランドの郊外にバス停があった。屋根もない、ベンチだけのバス停だ。雨の日だった。
ただでさえ小柄なのに、今よりいくらか小さいジンはそのベンチに寝ていた。理由は単純。金がなくどの宿にも泊まれなかったし、サイクロプスの目が原因で誰の助けも借りられないのだ。当時、サイクロプスの目が原因ということもわからなかった少女は涙も涸れ、点々と各地をふらふら渡り歩く生活をしていた。
そんな折、バス停を一台の車が通る。バスではない。もうこの時間では始発までバスは来ない。屋根のついた軍用のジープだった。
ジープから下りる人影をジンは見た。サイクロプスの目を持つと知れれば、二言目には罵声が飛ぶ。そんな状況になれていた彼女はベンチから動こうとしない。
人影は銀髪の青年だった。青年の口が開く。ジンとしては罵声を浴びせされる覚悟は出来ていた。ただ、殴られたり痛い目にあうのは嫌だったが、逃げる気力もなかった。
「大丈夫かい？　こんなところで寝てたら風邪ひくよ？」
しかし、青年が口にしたのは罵声ではなかった。この青年が、ジンの恩人であり彼女が名前を受け継いだ初代ジン・クレッシェンドである。

現在　バロウズ邸中庭

「何となく似てるのよね……」

ジンは膝を抱えてまどろんでいた。ルーウェンと初代ジンは外見が似ている。まるで生き写しだった。しかし、性格までは似ていない。初代ジンは紳士的だったが、ルーウェンはひっちゃかめっちゃかだ。

ジンは気付けば眠りについていた。

バロウズ邸　ロビー

「貴方、その魔法……！」

「え？　知ってる？」

ほむらはルーウェンが行ったことに驚いた。いきなり敵の腕を落としたことではない。

ルーウェンが発動したロッソ・ファンタズマという魔法だ。これは分身魔法で、原理としては相手に幻覚を見せているのだ。

「それは、佐倉杏子の……」

「杏子を知ってるのか。見なかった？　探してるんだが。ロッソ・ファンタズマもそいつから使い方を習った」

ルーウェンはあっけらかんと言った。この技はほむらの知り合いからの受け売りなのだそうだ。

「おいこれはどういうことだ！　計算違いだぞ！」

目の前で仲間の一人が腕を落とされた瞬間、武装集団は逃げ出したが、それと入れ代わりに一人の男が来た。

「やけに制圧が遅いと思ったら、たった二人に足止めされていたのか！　クリーパーはどうした？　おい、おい待て！」

「あ、黒幕来ちゃった」

男は武装集団に声をかけるも、武装集団は泣き言を喚いて逃げてしまった。男は一人取り残された。

「貴様がルーウェンか。よくも私の華やかな人生の邪魔をしてくれた。これ以上人生設計狂わされると困るんだよキモオタ風情が！」

男は気を取り直してルーウェンに喚いた。しかし、ルーウェンは

剣を構えて動かない。
「言いたいことはそれだけか、ゆとり」
「そんなこと言っていいのかな？　こっちには人質がいる！」
ルーウェンの反応に対して男は、人質を取り出した。人質の姿を見たほむらが思わず叫ぶ。
「メイ！」
「暁美さん！」
人質はメイだった。クリーパー2匹がメイを拘束している。男は高笑いをしている。
「てめぇ！　人質を取るってことは、死んでも文句ねぇよな！」
「いいかキモオタ。人質がいるということはこちらに君は手出し出来ない」
男は自信満々に語る。しかしルーウェンは、剣を構え続けた。
「私が時間を止めて……」
「その必要はないぜ。俺に案がある」
ほむらの提案をルーウェンは却下した。ルーウェンは一歩、男に向かって歩く。
「何もできんだろ？　私の能力でクリーパーを操ってるのだ。キモオタ風情にはない能力だ」
「知るか。ネタバレ乙」
ルーウェンは剣を振り下ろす。すると、男が爆風に吹き飛ばされた。風車斬りだ。なぜ斬撃なのに爆発するか不明だ。
「なっ！　なにを……！」
男の精神が乱れたことで能力の支配が解けたのか、クリーパーはどこかへ行ってしまった。洗脳系の能力は扱いが難しく、術者が精神の平静を欠けば容易に解ける。三ヶ月そこいらで完全習得出来るものではない。
ルーウェンは男がコントローラーの類を持ってないことを確認すると、男を攻撃して術を解除した。そうすれば男はクリーパーに指示が出せなくなる。

男は人質を失い、自分が非常に危険な状態にいることに気付いて慌てだした。
「ま、待って、許してくれ！」
「許さん」
必死な命乞いもルーウェンは無視する。
「私が悪かった！」
「俺は悪くない」
男はこの状況を打開する最後の手を思いついた。手持ちのナイフでもう一度メイを人質に取るのだ。手持ちのナイフといってもペーパーナイフだが、首筋を切れば充分人は死ぬ。
「フハハッ！　形勢逆転だ！」
男はメイに向かって飛び掛かる。しかし、ルーウェンも同時に動いていた。
「てめぇはとことん救えねぇ男だ」
男がメイに届く前に、ルーウェンは男を切り裂いた。踏み込みで男を通り過ぎ、男が真っ二つになるのを確認したらバク転でもとの位置に戻る。剣を収めたルーウェンは、メイまで歩いていった。その手には剣ではなくやたら豪華な花束があった。
「な、なに？」
遠くで見てるほむらは戸惑った。思わず目を擦って、何時からかかけてなかった眼鏡までかけて確認した。そのくらい、ルーウェンの行動は意味不明だった。
当のメイも困惑している始末だ。
「リアルアースにいる頃の俺じゃあ、自分に自信が無くて言えなかったんだ。けど、俺は今なら言える気がしたんだ」
「？」
ルーウェンは恥ずかしそうに目をメイから反らしながら、武装集団に言った時とは違う覚悟を持って言った。
「あなたが好きです！　付き合って下さい！」
ルーウェン全力の愛の告白が世界に響き渡った。しかし、メイの

心には響かなかったようだ。
「あの、意味不明です。あと、タイプじゃない」
ルーウェンは花束を取り落とした。ほむらは見てられないとばかりに屋敷に入った。

バロウズ邸　中庭

「ふふっ、いいじゃないか少年。まさに青春だ」
「あなたは？」
中庭に着いたほむらを待っていたのは、白い騎士装をまとった少女、クレアだった。プールサイドに腰をかけて、ジンを膝枕している。
「失礼。私はクレア・ハーディ。タイガーフォースの人間だが、同僚の馬鹿が迷惑をかけた」
クレアは丁寧に喋る。ジンを芝生に寝かせたクレアは、ほむらに向かって提案する。
「すまないが、必要ないならシザーマンを譲ってはくれないか？」
「初めからそうやって頼めばいいのよ。武器なんか使わないで」
「恩に着る」
クレアはそう言うと、小屋まで歩いていった。

バロウズ邸　寝室

「ここは？」
ジンが気づくと、寝室のベッドに寝かされていた。近くの机ではほむらとディズが話している。
「これはデカントアビリティという品だ。人の意思と能力が物を介してやり取りされる。佐倉という魔法少女からルーウェンがこのロザリオを受けとったのだろう」
「それで、佐倉さんの魔法をルーウェンが……」

ジンはそんな話を聞きながら、痛む体に鞭をうって起き上がる。
「っ……」
「起きたかね？」
「ディズ！　なんでこんなところに？」
ディズがバロウズ邸にいることの不自然さに気付いたジンは驚きの声を上げる。
「闇の回廊で来た。この建造物に興味が出てな」
「そうか」
ディズはサラリと質問に答えた。さすがに大人の対応だ。本当はおいしいアイスが町にあるから来てたのだが。
ジンはベッドから下りると、服を取り出すためにたんすを開けた。今の彼女はパジャマ姿だ。
「風雲たけし城」
ガチャリ。
たんすを開けたジンは即座にたんすを閉めた。ルーウェンが中にいたのだ。なんかこれ以上にない暗いオーラをまとって。
「ついに人を殺した罪深さに堪えれず、おかしくなかったか……」
「原因は失恋だ問題はない。確かに人を殺してはいたが」
ディズはジンのツイートをフォローして言った。明らかに笑いを堪えていた。研究と結婚したようなディズでは、今のルーウェンは滑稽にしか映らないようだ。漆黒の騎士団では数少ない男性組なのだから、少しは理解して欲しいとこだが。
「これでいいの……？」
「大丈夫だ問題ない」
ディズはたけし城（たんす）に篭るルーウェンを放置して部屋を出た。ジンは組織内の男女比率の偏りに不安を感じ始めた。

3．ルーウェン・ヴァイサス散る（後書き）

解説

暁美ほむら

『魔法少女まどかマギカ』に登場する魔法少女。時間を操る魔法を使う。

クリーパー

『マインクラフト』に登場するモンスター。爆発してせっかく建てた建物を破壊、リフォームするため匠とよばれる。落雷でパワーアップした姿は巨匠と呼ばれる。みんなのトラウマ。

シザーマン

『クロックタワー』シリーズお馴染みの追跡者。みんなのトラウマで不死身らしい。今回は樽に押し込められてたが、タイガーフォースに回収されたため再登場の可能性が高い。

番外　ハロウィン（前書き）

「ハロウィンって最初は収穫祭だったんだと。じゃあなんでお菓子をあげるようになったかって？　知るかバーカ！　リア充爆発しろ！　いや、斬る！」

『ルーウェン・ヴァイサス、フラれた直後にハロウィンについて語る』

番外　ハロウィン

トワイライトタウン　屋敷

「トリックオアトリート！」

「いきなりなに？」

コスプレしたルーウェンがいきなり叫ぶため、ジンは驚いてしまった。今日はトワイライトタウン全域でハロウィンパーティーが行われている。

ルーウェンのコスプレは吸血鬼。銀髪で中二病全開な外見の彼にはうってつけだ。

「世界崩壊はみんなの心に傷を作ったからね。それを癒すのも、漆黒の騎士団の仕事よ」

「そうなのか」

羽川に諭され、ジンは納得した。しかし、ディズの姿を目にした瞬間疑問が浮かんだ。

「あれはトナカイの角じゃないか？」

「間違えてるね」

トワイライトタウン　駅前

「いつもの格好でそれっぽくなるところが凄いな」

ロクサスはアクセル、シオンと黒コートで死神コスプレだった。ロクサスのつぶやきも理解出来る。

「私を忘れてもらっては困るわ」

そんな三人にほむらが近付く。いつもの格好でコスプレに見えるグループは仲良く町を練り歩くことにした。

トワイライトタウン　トラム広場

トラム広場はトワイライトタウンでも広い市街地だ。その市街地に高笑いが響いた。
「フハハハハ！　凶華様の華麗なるコスプレを見るがよい！」
「あ、ここにもいたよそのままでコスプレみたいなの」
通り掛かったジンと羽川が足を止める。高笑いをしていたのは乱崎凶華という小柄なネコミミ少女。ジンより頭一つ小さい。一応、魔女のコスプレをしてる。ショートカットの頭にあるネコミミは付けてるのではなく、生えてるようだ。
「で、誰？」
「避難所の子供達のリーダーみたいなものよ」
「凶華様はこれでも二十歳なのだが……」
ジンの質問に羽川は的確に答えた。しかし、当の凶華は不満げだ。実際酒もタバコもする大人だし、（特殊な事情があるが）家庭も持っている。だが、その姿はまだ子供だ。
「あ、凶華さーん。勝手に行っちゃだめですよー！」
「猫が増えた！　まだ本編出てないのに！」
ジンが声の方を向くと、猫がもう一人。ジンと同じくらいの背丈の女子高生、中野梓だった。先日の事件（第四話の話なのでジンがメタ発言せざるをえなかった）で知り合った軽音部のギター担当だ。ツインテールにした黒髪に合わせた黒のネコミミは生えてるわけではなく、カチューシャのようなもので付けたのだ。服装自体は高校の冬服だが、ご丁寧に尻尾がついてる。
「梓！　来てたの？」
「先輩と来ました」
久しぶりの再開に話が弾む二人。猫ばかり増えてることは、もう気にしない。
「男のネコミミ需要も忘れてもらっては困るなって、ルーウェンの奴が言ってたな。レディに親しまれるなら気にしないが」
「ウルフ・エニアクル！」

こちらもまた、避難所の子供達の人気者が白いネコミミを付けて登場した。ウルフ・エニアクルは地球連邦の軍人とジンは聞いていた。モビルスーツというロボットを操るらしい。白い髪に褐色の肌、性格に問題があるが卓越した操縦技術と親しみやすさで人気とか。ジンもウルフが操縦してるジェノアスという白いモビルスーツを見たことがある。あれに子供達を乗せているんだそうだ。

「ジェノアスはカスタム機でウルフ好みの白で塗られて……。ルーウェンってメカが好きなのよね」

「俺はあんたみたいなレディが好きだ。お菓子をあげずに悪戯されたいくらいだ」

「はいはい」

ウルフの言葉を無視すると、ジンは羽川の方を見た。ウルフに絡まれる前に場所を移りたいと考えたのだ。

「にゃおん」

「は、羽川？　いや……、ブラック羽川？　猫が増えすぎてついに？」

羽川は既にブラック羽川と化していた。ブラックというが髪も耳も白い。なぜこうなるかというと、それは羽川だからとしか説明できない。

「ど、どうにかしないと……。うわ！　猫バス！」

対応するためディズを予防としたジンだが、行く手を猫バスに阻まれる。また猫だ。

「だれか……、どうにかして。私、猫アレルギー……」

ジンのつぶやきは夕暮れの中に消えた。

番外　ハロウィン（後書き）

作者の級長です。今回は急遽、ハロウィン話書きました。次からは予定立ててやるッス。

急遽やったから、本編未登録のあずにゃんや時期的にいろいろ早かったウルフさんの二次登場とかになりました。

では、また本編をお楽しみ下さい。

4．砲火後ティータイム（前書き）

世界ガイド
桜ヶ丘高校
『けいおん！』に登場する高校。これといった特徴はない普通の学校。しかし、リアルアースでは有名なスポット。

4．砲火後ティータイム

トワイライトタウン　トラム広場

「なんだかんだ、大義名分掲げてもまだまだ子供なのよね」
以上がルーウェンの実情を聞いたヨヨの反応だ。ルーウェンは現在、フラれたショックでたんすに閉じこもっている。
「じゃあ、私そろそろ行く」
ナミネに頼まれた買い物を済ませたジンはヨヨと別れた。買い物は食料品で、荷車を使わなければならないくらいの量だ。だが、ジンの力ならたやすい。ジンは荷車を押して帰ることにした。
「しかし重いな……。怪我があるとはいえ、こんな程度で音を上げるほど私は弱かったか？」
ジンは首を捻った。普段の自分なら余裕と思っていた重量だが、怪我のせいかなんなのか、体が悲鳴を上げている。
「ジン、大丈夫？」
「シオン！」
ジンが立ち止まっていたら、巡回警備中のシオンが近付いてきた。シオンはナミネがジンにこんな無茶を頼んだのは、ジンに戦える身体でないことを自覚させるためと知っていた。だからジンを見守っていたのだ。
「闇の回廊を使うよ。そっちの方が楽だし」
シオンは手をかざして闇の回廊を開く。楕円型に闇が広がり、入口になる。この闇の回廊は世界間の移動だけではなく、同じ世界の中を移動することも可能だ。いわばどこでもドアだ。
「……」
本来、楽を好まないジンはシオンの提案に乗るのをためらった。しかし、身体が限界なのも事実だ。仕方なくここはシオンの言う通りにしたジンだった。

屋敷　会議室

「ふう。なんか身体の調子がおかしいのよね……」
「休んだら？」
ジンが会議室で体調不良を漏らすと、羽川が休むことを提案する。確かに最近激戦続きで、身体が丈夫なジンもそろそろ限界だ。しまっちゃうおじさんと戦う前から、ユニバースの仕事で蓄積した疲労もある。
「今回の仕事は簡単よ。ある世界に行って、八元素のリングを持ってくるだけ。タイガーフォースも見つけてないみたいだから、戦う必要はないんじゃないかな？」
羽川が提示した資料には、震土のリングが桜ヶ丘高校から発見されたと書かれている。
「なるほど。行ってくる」
「それと、新しいメンバーがいるから連れて行ってね」
「新しいメンバー？」
羽川の言葉に部屋を出かけたジンは立ち止まる。そして、新メンバーは彼女が瞬きをする間に現れた。
「ほむら！」
「ここが本部なの？　思ったより落ち着きがあるのね」
新メンバーは暁美ほむらだった。ほむらは黒いカードをジンに投げ渡す。
「時計のマーク。私が三日月でルーウェンが十字架、と」
ジンはカードに書かれたマークを見た。このカードを持ってるということは、既に手続きは終わらせたみたいだった。あることが気になったジンはほむらに聞くことにした。
「メイは？」
「トラヴァースタウンの避難所に行かせたわ。ここじゃいづらいでしょうから」

ほむらの答えに、たしかにとジンは納得する。自分がメイでも、ふった男と出くわす可能性の高い町には住みたくない。避難所は様々な世界に展開しており、トワイライトタウンはその一つに過ぎない。どの避難所も王様と呼ばれるネズミに支援、管理されている。

「私の魔法は時間操作。武器は魔法で出ないから、現地調達よ」

「パイプ爆弾はいくつか持ってくのね。ゴルフクラブまで持って」

「世界によっては武器になるものがない場所もあるって赤い人が言ってたから」

ほむらはリュックに自作の爆弾を詰め、ゴルフクラブを持った。赤い人とはディズのことだろう。

ジンもユニバースの都合でいろいろな世界を知ってるが、とある動物しかいない森の世界では斧くらいしか殺傷能力のあるものがないとか。スコップも辛うじて武器になるかどうかだ。

「じゃあ、行こう」

「ええ、私には探さなければならない人がいるもの」

ジンとほむらはそれぞれの決意を持って、グミシップへ向かった。

トワイライトタウン　地下通路

「こんなところにいた」

「……ヨヨか……」

トワイライトタウンには地下通路が通っている。その地下通路の奥で、ルーウェンはぐったり倒れてふて腐れていた。

「そりゃあ、あんな告白じゃフラれるわよ」

「あれが本気で成功すると思っていた俺は一体……」

ヨヨの言葉にルーウェンは力無く応える。彼はショックと同時に自己嫌悪にかられているようだ。

「この世界には女なんか五万といるわよ」

「そんなこと言ったってぇ……」

ルーウェンは完全に再起不能だった。なんかいろいろダメな状態。

「そうだ。気分転換しない？」
「気分転換？」
ヨヨは気分転換を提案する。確かにこんな時は忘れるのが一番だ。次にヨヨは、具体的な方法を提示する。
「サラマンダーで走るとか」
「サラマンダー？」
ルーウェンはオンロード最速ブランドの大型バイクを所有している。それがサラマンダーだ。正式名称はサラマンダーＲＸ－７０『ファイアドレイク』だ。
「いいコース知ってるのよ」
ルーウェンはひとまず起き上がり、ヨヨの提案に乗ることにした。

桜ヶ丘高校　運動場

グミシップは運動場に着陸した。リアルアースによく似た外見の校舎にポップなデザインのグミシップは浮いている。
「ここに震土のリングがある……」
「グミシップはこんな目立つ場所に置いてあっていいの？」
ほむらが言うなり、グミシップは天高く浮上した。着陸したのは上空から飛び降りるのがジンの身体に負荷をかけるためである。しかし、目立たなくなったわけでもなく、逆に未確認飛行物体として扱われかねない雰囲気だ。むしろ、そちらの方が厄介だ。
ほむらはまだ魔法少女に変身しておらず、自分が通ってるという中学の制服のままだ。制服のデザインがブレザーなので、中学の制服といえばセーラーといったイメージの強いジンは、ほむらを一瞬高校生かと思った。
「音楽室にあるんだな」
ジンは資料の地図を暗記しており、音楽室に迷わず歩く。ほむらもそれについていく。校内はそれほど入り組んでなく、当然のように罠もないのですんなり音楽室にたどり着いた。ジンとしては、八

元素のリングのうち一つを保管してるならもっと警備を厳重にしてほしいところだ。
「うー。学校自体初めてだから緊張する」
「緊張するなら職員室じゃないかしら？」
「羽川がアポ取ってあるから大丈夫だけど」
ほむらのツッコミは軽くスルーして、ジンは扉をノックした。
「はーい。今いきますね」
扉を開けたのは、黒髪ツインテールの女子高生。背丈に関してはジンと同じくらい。
「資料にあった、中野梓ね」
「は、はいそうですが？」
ほむらの固い言葉に、梓はつい敬語で話す。ほむらは中学生なのだが、雰囲気では梓より年上に見えてしまう。
「おっ。連絡くれた漆黒の騎士団の人？　あまり黒くないな」
奥からカチューシャで前髪を上げた部長、田井中律が出てきた。黒くないとか言われたジンは反論出来ずに呟いた。今の彼女達に黒要素はほむらの黒髪ロングしかない。ルーウェンがいれば黒要素は格段に跳ね上がるのだが。
「新規メンバーは黒要素が徹底されてない」
「そうなのか」
「納得されましてもっ……！」
ジンは早速ペースを掻き乱された。しかし、奥の音楽室を見ると人数が足りないことがわかった。もうあと、3人いたはずだが。だが本題は震土のリングを手に入れることだ。人数が足りなくても問題はない。
「しかし、学校という割に人がいないな。今年度で廃校するのかここ」
「いや、普通に休日だから」
ジンのボケ（本人は真面目に思った）に律は間髪入れずツッコミを入れた。こういうやり取りは慣れてるのかもしれない。

「チャリティコンサートの準備で先輩達は体育館にいます」
梓の言うことには、残りの三人、唯、澪、紬はチャリティコンサートとやらの準備をしてるためいないのだ。彼女達軽音部はリアルアースでも人気が高く、ファンも多いとか。チャリティコンサートの収益を避難所に寄附して、自分達の世界を無くした人達の自立を支援するようだ。軽音部も漆黒の騎士団と違う方法で、この事態に立ち向かっているのだ。
「まあまあ中入って。ゆっくり話そうじゃないか。なんたらのなんとかとやらは職員室前のトロフィーが並んだ場所にあるから、さわちゃん来るまで待ってて」
「震土のリングですよ」
梓のツッコミを受けつつ、律は二人を音楽室に入れた。音楽室には疑問が残るレベルで私物があったが、ジンは本来の音楽室を知らないので気づかなかった。
「で、この私物の山はなに？」
「お恥ずかしい……」
ほむらだけは気付いた。部長の律も中学生に言われては面目もない。
「あれ？　音楽室ってこういうのがあるんじゃ……？」
「これは私達が持ち込んだんですよ」
「え？　違うの？　てっきりこのぬいぐるみで一人演奏会とか……」
「寂し過ぎる！」
「じゃあ、この薬局にありそうなカエルの置物はこの世界特有の楽器とか……」
「なんか天然ボケが唯より酷いな……」
律は疲れたようにうなだれた。ジンは本気なのだが。実際、一人演奏会はやったことがある。梓もそんなジンを唯と比較してみる。
「一見、しっかりした唯先輩みたいに見えますけど」
「あの子、あれで傭兵なのよ。私なら絶対雇わない」

ほむらは絶対を強調した。ジンは傭兵としては一流だが、まだ中学生くらいの少女だ。そうした歳相応な部分も、あるにはある。
ぼろくそに言われたジンはしばらくガックリなっていた。ほむらの絶対に雇わないが大打撃らしく、所謂『ｏｒｚ』状態になっている。彼女は社会経験が少ない分、アイデンティティの大半を傭兵という肩書に頼っている。そこを突かれると弱いかもしれない。
「……！　この匂い！」
ジンはいきなり顔を上げた。なにかの匂いに反応したようだ。ほむらも気を配るが、音楽室には甘い匂いがする一方だ。
「こいつ、ケーキの匂いに……！　結構薄れてると思っていたが、結局『戦えそうな唯』か！」
「なんですかその称号……」
「伏せろ！　これは火薬の臭いだ！」
律と梓の会話にジンの緊迫した声が割って入る。ほむらが状況を確認する前に、音楽室の壁が爆発した。
「なっー！　音楽室が爆発した！」
律が驚くが、爆発での負傷はなかったみたいだ。梓とほむらも同様だ。三人共、爆発が強く吹き飛ばされはしたが致命的な傷はない。だが、
「う、ぐっ……。大丈夫、か？」
「ジン！」
律は起き上がってジンに駆け寄る。三人のダメージが少なかったのは、ジンが壁になってくれたからだ。彼女は小さな身体で爆風を遮るため、太刀を抜刀して横に凪いだ。しかし、三人は守れてもジン自身に及ぶ分まではダメージを防げなかった。
「大丈夫か！　なにが起きて……」
膝をつき、太刀を支えにしてようやく立っているジンに、律が心配そうに声をかける。ほむらは壁に開いた穴から、爆撃を行った犯人を見つけた。それも複数。
「二足歩行のロボット？」

ほむらは敵を確認すると、魔法少女に変身した。光に包まれたと思ったら、すぐに衣装が変わってるため律も梓も驚いた。
「私が爆撃を抑える。その間に避難して。敵は複数よ」
「わかった。私が二人を誘導する」
ジンが同意すると、ほむらは消えた。時間を止めて敵のいる場所に向かったのだ。時間停止には制限があるらしく、非戦闘員である律と梓を避難させる間中時間を止めておく、なんてことは出来ないようだ。それなら、負傷したジンの代わりに敵を引き付けようというのが、ほむらの算段だ。
「行こう。ほむらでも全部の敵を引き付けられるとは限らない」
ジンは律と梓を連れて、音楽室を後にした。

今週のアイキャッチ（ルーウェンが体育館の中、ステージを背景に剣を構える）。
ＣＭ。こだまでしょうかのあれ。挨拶の魔法1分バージョン。
ＣＭ明け。アイキャッチは無く右下のロゴのみ。

桜ヶ丘高校　体育館

「もしかして熱狂的なファンとか？」
「どう見ても、違う！　そしてさっきの謎描写に疑問はなに！」
体育館にいて難を逃れたはずの唯、澪、紬の三人は敵に銃を突き付けられていた。唯の天然に澪は全力でツッコミたくなった。正直、それくらいしかこの現実から目を背ける方法が無かった。澪はさっき挿入されたアイキャッチとＣＭにも触れておく。こういうのをメタ発言という。
音楽室は爆撃されたが、楽器はすべて体育館にあったので無事だ。だが、敵はその体育館すら跡形も無く吹き飛ばしかねない雰囲気を持っていた。
「我々はタイガーフォースだ！」

「リアルアース復活の妨害は許さない！」
タイガーフォース所属の兵士達はリアルアース出身らしく、リアルアース復活なんていう大義名分を掲げていた。しかし、実際はオタクの聖地に等しいこの高校を破壊したいだけであった。
「で、核未搭載小型メタルギア部隊は？」
「フェーズはすでに、校舎の爆撃に移ってる」
「いいなー。そっちの方がよっぽど楽しそうじゃん」
「キモオタ共がブヒブヒ喚くのが目に浮かぶようだぜ」
「ホントだな。あんな奴らがいるからリアルアースは崩壊したんだ」
兵士達の言動からそれは伺い知れる。節度を失った軍隊ほど恐ろしいものはない。彼らは武器も持ち、軍服も着てるが、軍人としての気概は持っていなかった。まさに、遊び感覚で破壊と殺戮を振り撒いている状態だ。もしかしたらタイガーフォースのトップである男が襲撃を人が少ない休日にしたのは、これを事前にわかっていたからかもしれない。ともすれば、タイガーフォースは優秀な指揮官を有することになる。破壊大好きアホ軍団を使いながら、敵側の犠牲は最小限で済むように計算されていたのだから。彼らの目的もまた、震土のリングだ。
「じゃ、漆黒の騎士団が死ぬの待ちますか」
「あと3分は持つかな？」
「お茶でもどうぞ」
「おい！」
敵にお茶を勧める紬。澪は止めたが、何故かあったティーポットから紬は丁寧に人数分お茶をいれる。
「あ、じゃ、いただきます」
「おい待て、毒が入ってるかもしれない！」
「え？　じゃあ俺が毒味してやるよ」
迂闊な兵士が紅茶を勧められるまま飲もうとするのをリーダー格の兵士が止める。しかし、黒いコートに包まれた腕が伸びて、紅茶

のカップを取る。そして腕の主は紅茶を飲んだ。
「うまいな。俺コーヒー派なのに。ホントにうまい紅茶飲んだことないからかな？」
腕の主は、銀髪を揺らして感想を述べた。背中の片手剣は大人しく鞘に収まっていたが、この殺伐としていた雰囲気の中、いつ抜かれてもおかしくない。
「というわけで、ルーウェン・ヴァイサス参上！」
「貴様いつから！」
腕の主はルーウェンだった。兵士達は一斉に銃を構える。ルーウェンは芝居がかったポーズで肩をすくめながら答えた。
「おっぺけぺーのよいよい、あらほらせっせの下りからいた」
「いつだ！」
「さっき挿入されたアイキャッチ、あれ思い出せ。背景がここだったろ？」
言われて澪や兵士達はアイキャッチを思い出す。そして同時に納得した。
「「あれか！」」
「あれだ。先週までなかったものがあっただろ？　わざわざ幻影魔法で見せた甲斐があったぜ」
「貴様ふざけてるのか！」
兵士の言葉にルーウェンは急に真面目になった。所作の端々、彼の一挙一動に殺気が滲んでいる。
「大まじめさ。少なくとも、殺される覚悟もなく武器を持つお前らよりは、な」
ルーウェンは目隠しの帯と耳栓をそれぞれ三つ、澪達に投げ渡した。
「それしとけ。特に澪。こっからはあんたの嫌いな、流血の時間だぜ」
澪は血という言葉に反応して、即座に目隠しと耳栓をした。
気分転換したルーウェンは、もう精神的なダメージから立ち直っ

ていたのだ。

桜ヶ丘高校　運動場

校舎の反対側ではほむらが核未搭載小型メタルギアの相手をしている。ジンは辛うじて二人を避難させた。

「私を置いて、先に、行ってて！」

「ジン！　出来ねぇよ！　死亡フラグだろ！」

しかし、状況は最悪だった。運動場の中央で敵に囲まれてしまったのだ。ジンには律と梓を守りながら戦う力は残されていない。二人だけでも逃がしたいが、律の人格がそれを許さなかった。避難する間ジンは二人を守るために、敵の砲撃を身体で受け続けてダメージが蓄積している。

「敵の二足歩行マシナリーはグリナ・ビートSが3セット。シノワ・ヒドキが15機。グリナ・ビートCは30機。四足歩行マシナリーはシーカー、ボーマルタ、ティレントスが数えられないくらい、か。全部グラール製のマシナリーね」

ジンは即座に敵の勢力を確認した。とても倒し切れない数だ。全開の彼女でもできるかどうか、そのレベルの話である。

「あ、ヘリコプター」

「え？」

梓が上空の音に気付いて見上げると、ヘリコプターが滞空していた。ジンはそちらに気を取られる。そしてヘリコプターから人影が降りてくるのを見た。

「こいつは！」

人影は地面に降り立った。人影の正体はネメシスだった。ネメシスはロケットランチャーを装備している。

「馬鹿な！　こいつは倒したはず！」

ネメシスは前回戦った時と違い、上半身のコートがはだけて触手が発達している。

「まずい！」
ネメシスはロケットランチャーをジン達に向けて放った。ジンはすぐ、二人の壁になるように前に出た。
ロケットランチャーの弾頭は光と熱を放つ。

桜ヶ丘高校　校舎裏

「あなたは？」
「ブラックロックシューター……」
ほむらはメタルギア軍団を半数ほど削ったところで、思わぬ支援を受けた。黒いコートを着た、長い黒髪のツインテールをなびかせる少女だ。背中のフライトユニットもよく映える。ブラックロックシューターという長い名前を呟いた少女は、バヨネットと呼ばれる銃剣を先端に付けた長大なキャノン砲をメタルギア軍団に向け、連射した。ほむらが気付くと、メタルギア軍団はいなくなっていた。

桜ヶ丘高校　運動場

ジンは死を覚悟していた。しかし、いつになっても膨大な熱は彼女のか細い身体を焼かない。爆発音はすでにした。熱も感じた。ジンはゆっくりと目を開けた。
すると一台のバイクが目の前に転がっていた。
「キノひどい」
「バイクが喋った！」
バイクがいきなり喋るため、律が驚いた。バイクなんて喋るものじゃない。
「エルメス、ナイス！」
「投げたのはキノじゃないか」
少し離れたところから声が響く。セーラー服を着た短髪の少女だ。ガンベルトをしていて、銃のホルスターといくつかの緑色ポーチが

ついている。
「一気に片付けてご飯にしよう！」
キノという少女はポーチから銃を取り出して敵に向ける。出した銃はミニガンというガトリング砲。大きくて、ゲームなどでは人が持って使用してるが本来はできないくらいの反動がある。
キノはジンより少し大きいだけの体格なのにも関わらず、ミニガンを敵に難無く掃射。敵の集団はあっという間に壊滅した。
「あとはデカブツだけ！」
キノはミニガンを仕舞うと、ポーチからロケットランチャーを出す。ＲＰＧ７。ゲームではお馴染みのザ・ロケットランチャーというべき品。
「ファイアー！」
ロケットランチャーはネメシスに直撃、体勢を大きく崩した。ジンもすかさず援護を行う。
「流星爪！」
振った太刀から飛んだ斬撃がネメシスに命中する。ネメシスはダメージがかさみ膝をついた。キノはロケットランチャーの筒を捨てるとホルスターから大型リボルバーを取り出す。
「ビッグカノン、魔射滅鉄！」
「キノ。相手魔物じゃない」
「威力は充分！」
キノはバイク、エルメスの忠告を無視してビッグカノンと呼んだリボルバーを放つ。弾丸はネメシスの頭にクリーンヒットして、頭を消し飛ばした。
運動場での戦いはその一撃で収束した。
「あれは……？」
ジンは安心して身体から力が抜けた。しかし、意識が薄れる中、体育館の方へ向かう見覚えのある少年の姿を見つけた。名前はたしか、バン・グローリー。

桜ヶ丘高校　体育館

「これはどういうことだ！」

「命ははかないな。ほんの一閃の太刀筋で散ってしまうのだから」

体育館にバン・グローリーは到着した。しかし、目の前に広がっていたのは惨劇だった。開けられた扉の外に、体育館を占拠する予定の仲間の死体がぶちまけられていたのだ。ルーウェンはチャリティーコンサートの会場である体育館を極力汚さないように、事前に体育館中の扉を全開にして敵をそこから叩き出しながら戦ったのだ。軽音部の三人は既に避難させてあった。

「どういうつもりだ！　まだ攻撃を行ってない人間すら殺すとは！」

「決まった…！」

「てめぇ！」

ルーウェンは自分の世界に入っていたため、バンの憤りなどどこ吹く風である。ルーウェンなら、『武器を構えた時から戦いだ』と答えたであろうが。

「お、いつぞやの甘ちゃんじゃないか。お仲間のお肉でも引き取りに来たのか。人肉なんかマズイからやめとけ。廃棄は任せたが」

「そういう意味じゃない！　なぜ皆を殺した！」

「知るかゆとり。自分がめちゃくちゃ弱くてグズのノロマなせいで仲間守れなかったの棚上げして逆ギレかよ。ま、仲間が武器持っても覚悟は持てないクズぞろいじゃつるんでるあんたの程度も知れるってもんだ。あいつらの最後の言葉教えてやろうか？　『助けてー。命だけはー』だってお。あひゃひゃ、マジウケるんですけど！　武器持ってる時点で死ぬことくらい覚悟しとけし！　あー、腹痛てぇ！」

ルーウェンはバンに嘲笑を向けながら笑い転げた。武器を持つからには死ぬ覚悟を持つのが当たり前なルーウェンにとって、タイガーフォースの兵士の末路はどんな漫才よりも笑えるのかもしれない。

「ルーウェン・ヴァイサスーッ！　てめぇに人間の心はねぇのか！」
「あるよ。少なくとも無駄な犠牲出して楽しんでるお前らより、な。あいつらみたいなクズをほかっておくと、罪の無い人間の血と涙が流れる。俺が手を汚せばそれを防げるんだ。こんな簡単なこと、やらないって奴の方が人間の心ってのが無いぜ」
ルーウェンはすぐ正常に戻り、バンに告げる。これが覚悟を決めた人間と軽い正義に燃えるマヌケの違いだ、と言わんばかりに。しかし、それはバンの怒りに油を注ぐ結果となった。
「説得してやめさせればいい！　なんで殺すんだよ！　説得を諦めた時点で、その主張は間違ってる！」
「おーおー。甘ちゃんが吠えとらっせる。怖いよー」
ルーウェンは始めからまともに取り合わなかった。完全にバンを茶化し始めた。
「貴様ーッ！」
「おやおや。説得でやめさせるんじゃなかったのかい。結局てめぇの信念はその程度か」
バンはルーウェンに殴り掛かった。しかし、ルーウェンは慌てず身体を右に反らして避ける。
「おらよっと」
ルーウェンはバンの顔面を殴り飛ばした。バンは１０ｍほど飛んでいった。ルーウェンは剣を抜いてバンに近寄る。
「なんかさ。お前を生かしておくと誰かが悲しむことになる気がしてる。だから斬る」
「や、やめろ！」
「竜巻破裏剣！」
「うぎゃー！」
バンの悲鳴が体育館に響き渡った。

数分後　桜ヶ丘高校音楽室

「すげー！　本当に元通りだ！」
「朝メシ前、とかいうとこよ」
ほむらの魔法で時間を巻き戻された校舎は元通りに直った。皆を集めてお茶会ということになった。
「わーいケーキだ」
「……」
キノとブラックロックシューターはそれぞれの反応をする。エルメスはバイクからストラップになっていた。ほむらは二人の素性に関してルーウェンに聞いてみた。
「誰？」
「キノコ王国のサーキットで知り合った。連絡受けて、戦力になるから連れてきたんだ」
「連絡？」
ルーウェンが不可解なことを言う。世界を渡ったのは闇の回廊だとしても、ほむらもジンも、ルーウェンに連絡など寄越してない。
「ヨヨが桜ヶ丘高校で大規模な敵襲って、教えてくれてさ。そうだ、震土のリングは？」
「あ、さわちゃんに『来るな』ってメールしたから、後少し待っ……」
「その必要はないわ」
ほむらが律の言葉を遮り、震土のリングを差し出した。
「爆撃でトロフィーの入ったショーケースが割れたから、直す前に取っておいたの」
「すごーい。これならケーキを半分食べて時間戻してって、いつまでも食べれるね！」
「時間戻した時に吐き出すことにならないか？」
唯がほむらの魔法の応用を思いついたが、澪の現実的な意見に実践をやめさせられた。
「ジンさんもどう？」

「あ、ああ……」
紬に誘われ、ジンはぎこちなく輪に入る。みんなで騒ぐのは苦手かもしれない。
けれどもジンは、たまにはこういうのも悪くないと感じた。

4．砲火後ティータイム（後書き）

解説

メタルギア

メタルギアシリーズお馴染みの歩行戦車。通常の戦車では立ち入れない場所にも入れる。本来は核を搭載してるが、桜ヶ丘高校制圧戦で投入されたのは小型の核未搭載機。メタルギアシリーズ本編にはない、タイガーフォースオリジナルのバリエーション機。

ネメシス

バイオハザード3に登場する追跡者。みんなのトラウマ。今回は第二形態で登場。ちなみにあの後、クレアが回収したため再登場の可能性あり。

謎の美少女ガンファイターライダー・キノ

高校生の木乃が変身した姿。学園キノに登場する。大量の銃器を使う時雨沢得なヒロイン。ストラップのエルメスは喋り、バイクに変身する。大食いで有名。

番外　ポッキーの日（前書き）

「ポッキーってなんだ？　食えるのか？」

『ジン・クレッシェンド、知らないポッキーという単語について語る』

番外　ポッキーの日

１１月１１日　ホウエン地方　ミナモシティ

自然豊かなホウエン地方。その港町ミナモシティ。そのデパート屋上で、赤い髪を黒いリボンでポニーテールにした少女がフェンスにもたれて言った。

「今日は何の日だ？」

隣に立つルーウェンはそれにすかさず答える。

「あれ？　杏子って誕生日今日？」

「違う！　ポッキーの日だ」

杏子はポッキーをくわえて言った。確かに、今日の日付はポッキーに見えなくもない。

「そんな事言ったらプリッツとかトッポも当て嵌ま……」

「無粋なことを言うんじゃねぇ。あたしは今日を、ポッキーの日として認識しているのさ」

杏子謎のこだわり。やはり、ポッキーをトレードマーク的に用いる杏子はポッキーに並々ならぬ思いがあるのか。

「で、味は何が好きなんだ。俺は個人的に苺だな」

「ノーマルに決まってんじゃん」

そんな杏子は決まってノーマルのポッキーを食べている。プロのポッキーマニアには、ノーマルが一番なのか。

「ポッキーといえばポッキーゲームだが、今回はやる必要ないだろ」

「ポッキーゲームねぇ」

ルーウェンがポッキーで思いついた話題を振るが、別にポッキーゲームをしたいわけじゃない様だ。実際、女の子と面と向かって話すことすら、ルーウェンには困難だ。今も杏子と目を合わせていない。漆黒の騎士団メンバーはルーウェンと話す時、ルーウェンの目

線があらぬ方向にいってるのに気付いているのだろうか。羽川やほむらあたりなら気付いてるかもしれないが、他人の目を気にしないジンや、色気より食い気な木乃は気付かないだろう。

「今思えば、漆黒の騎士団って女率高いよな。あれから男増えた？」

「増えたのは女だ」

杏子が男女比について聞くと、ルーウェンは頭を抱えながら答えた。研究と結婚したみたいなディズや、軟派なアクセルならまだしも、思春期のルーウェンとロクサスには女の子しかいない空間は命を削り取られるだけだ。しかも、両方奥手だ。

ルーウェンの様子を見て、杏子が悪戯っぽく笑う。

「今度同盟組まない？　魔法少女連盟と」

「俺とロクサス殺す気か。さらにその屍を踏み越えてアクセルが電話番号とか聞くとこが容易に想像できるからやめよう」

杏子は予想通りの答えを聞いて満足そうだった。

番外　ポッキーの日（後書き）

今回はポッキーの日いうことでこんなの書きました。てか、また本編より先にキャラ出るしｏｒｚ

ポッキーといえば、まどかマギカの杏子だろうということで、本編合流前に出しました。次の話で出ます。ルーウェンの幻影能力はお察しの通り、彼女から貰ったものです。デカントアビリティって奴です。

それはさておき、級長的には一人の知識で漫画やアニメ、ゲームをフルカバーするのは限界ッスマジで。

そこで感想などで、出して欲しいキャラのリクエストお待ちしてます。作品名と名前があればググれます。では、この辺で。

5．ひとりぼっちは寂しいもんな（前書き）

世界ガイド
カイナシティ
ホウエン地方の港町。市場が開かれフレンドリィショップ涙目な町。実際、市場でこそないが浜辺にある海の家で買えるサイコソーダはいいきずぐすりより回復量が多くて安い。

5．ひとりぼっちは寂しいもんな

トワイライトタウン　屋敷

屋敷の会議室では、あることを決めるためにルーウェン、木乃、ほむら、ブラックロックシューター（ＢＲＳ）の四人が集まっていた。

キノは変身ヒロインなので変身前の姿、つまり高校生の木乃、になっている。だが、ほとんど違いが見られない。強いて上げるなら、ポーチの留め金の動物が変わったくらい。

まず、ルーウェンが口を開いた。

「ディズ曰く、『他の世界の知識があるジンとルーウェンに後一人を加えた三人一組で行動すべし』だそうだ。そこで俺は、くじ引きを行う」

「くじ引き……？」

ＢＲＳはルーウェンが差し出したくじ引きに興味を示した。くじ引きは秋葉原お馴染みのパン缶の空き缶に割り箸が三本入ってる。恐らく、この三本の内一本の先端が赤く塗られてるに違いない。

「それで、ジンは？」

「スマン、遅れ、た……」

ほむらがジンの所在について聞くと、会議室の扉が開いてジンが現れた。太刀を杖にしてグズグズのグダグダのフラフラだ。額に冷えピタを貼り、肩で息をしていて苦しそうだ。

「風邪か。ならもう一本赤い棒を追加して……」

「大丈夫、だ、同志ルーウェン！　私はまだ、戦える！　新技、の……アイディアが固まった今！　我々は何も怖くはない！　万国の労働者団結せよ！」

「どうしたんだ？　資本主義の現実でも垣間見たのか？」

ジンのキャラ崩壊ぶりは完全に大丈夫じゃない感じを滲ませてい

た。強がろうとして、昔の社会主義者みたいな台詞だとルーウェンは独断と偏見で思った。
ほむらと木乃はルーウェンが粛清される前にジンをたしなめた。
「これは誰がどう見ても、戦闘の疲労が蓄積してるわね……。しかもその死亡フラグ、まんまマミよ」
「大変！　私がお粥作ってあげるから寝てて！」
「木乃の料理なんか食べたらお腹壊むぎゅ！」
エルメスが余計なことを言うので木乃は握り潰した。ストラップ状態のエルメスは簡単に握り潰される。
しかし、ジンのキャラ崩壊はやばいことになっていく。作画だったら目のハイライトが消えてるかも。
「なるほど、貴様らは我らが『病は気から主義』に反感する退廃した『コンビニ受診主義者』なのだな！　私の健康状態について疑うことは階級的な犯罪であり、病は気から主義の勝利を疑う医師協会的反動分子であることを示すものである！　粛清が必要だ！」
ジンは太刀を抜き放つと、ルーウェン達に向けた。流石に混乱もここまでくるとやばい。ルーウェンも仲間までは斬ることなどできない。
「ウラーぁぁぁあああああぁぁぁぁぁアァアアア！」
「ダメだ！　これはロシア語で万歳を意味する言葉！　こいつ完全に社会主義に染まった！」
「なにをどうしたら風邪で社会主義者に転身するのよ！　私の周りで赤いのは佐倉さんだけで充分！」
「ロシアってピロシキが美味しいよね」
「今って食べ物の話をしてる場合？」
「……」
ルーウェン、ほむら、木乃、エルメス、ＢＲＳがそれぞれの反応をする中、ジンの太刀が振り上げられる。正直、ルーウェンも全快のジンの一撃を見たことはない。だから防げるのか、そもそもどんな技で来るのかも予測がつかない。

さらにいえば、錯乱状態のジンは全快時以上の力を発揮する危険もある。ルーウェンは覚悟して、ジンの技を待った。
「両断、絶爪！」
「まったくの新技？　いや、太刀に気を込めて切れ味増してる！」
振り下ろされた太刀は、紅いオーラをまとっている。対するルーウェンは背中の鞘から剣を抜く。
「練習中の技だが、逆にちょうどいい！　『ミラージュ×ビューア』！」
ルーウェンは剣に青いオーラをまとわせた。ルーウェンの方が若干強そうだ。これならいける気もする。
「一つ問題がある」
「なに？」
ルーウェンの呟きに木乃が反応する。
「これって幻影だから、威力増えてないんだよね」
「ダメじゃん！」
「ＷＲＹＹＹＹ！」
ついに吸血鬼みたいな叫び声まで上げ始めたジンに、ルーウェンの新技はなすすべなし。ミラージュ×ビューアは相手の視覚を騙す技なのだ。ルーウェンは遺書書いといてよかったとか考えていた。
「ロード、ローラー、だ……ッ」
しかし間一髪、ジンは太刀を振り下ろす前に倒れた。息が荒く、ずいぶんと苦しそうだ。

屋敷　ジンの部屋

「あー、互いに死ぬかと思った」
「戦闘のダメージが回復しきってないのね。しばらくは仕事させない方がいいわ」
羽川の言う通り、ジンはここまで全ての戦闘で重大なダメージを受けている。それが今日になって爆発したのだ。

「んじゃあサクッと薫風のリングとってくる」
「よろしく」
ルーウェンは仕事に行くため部屋を出た。屋敷には多数の部屋があり、漆黒の騎士団メンバーには一人ひとり部屋が割り当てられている。ジンの部屋はほとんど何もなく、ジンが住み始める前と対して変わってない。あるのは始めから部屋に置かれていた机、ベッド、クローゼットくらいだ。
羽川はジンの額に濡れタオルを乗せて、もうちょっとなにか置けばいいのに、と思った。

屋敷　ロビー

「で、今回行くのは俺、ほむら、木乃の三人か」
「私は上空から町を警護する」
ルーウェンは出立メンバーを発表した。ＢＲＳはフライトユニットを起動して飛び立った。あのフライトユニットはかなり速く飛べるみたいだ。
「じゃあ行くか。今回の仕事は薫風のリングの回収。アクセルが同行する。場所はカイナシティか」
「カイナシティはホウエン地方の港町で、ミナモシティとの連絡船が出てるわ」
ルーウェンにほむらが情報の補足をする。港町に木乃が反応した。食い物関係だ絶対。
「港町なら新鮮な魚介類が？」
「木乃、仕事優先。それにコイキングくらいしか魚いないんじゃない？」
急造ルーウェンチームは波乱含みでグミシップへ向かった。

カイナシティ

「ついたぞカイナシティ」
「あ、アクセルどっか行ったわ」
「アイス巡りでしょどーせ」
ルーウェン、ほむら、木乃の三人がカイナシティに降り立った。アクセルは勝手に動こうとしたのをほむらに見咎められていた。
「海岸沿いの警備だ。俺に任せとけ。俺、強いから」
「じゃあ、私は市場の警備！」
「私は町でまどかの目撃情報を調べるわ。ルーウェンは博物館のクスノキ館長と交渉して薫風のリングを貰って」
アクセル、木乃、ほむらはルーウェンから離れて行動した。確かに配置的にはカイナシティ全域を警護できるが、目的は薫風のリング。なら博物館に戦力を集中させるのがいいとルーウェンは思っていたのだ。
「お、おい？　俺ってこん中じゃ一番弱くないか？　しまっちゃうおじさんだって不意打ちだし、今までの敵は雑魚過ぎんだよ！」
「頑張れ」
アクセルの薄情な一言でルーウェンは町の真ん中に置き去りにされた。ルーウェンは強いと思われがちだが、本人は自身を過小評価してる点がある。
ルーウェンのリアルアースでの能力は勉学、運動共に平均以下。周り曰く、『無茶苦茶に頑張る以外才能ない』とか。しかもその努力すらやり方を間違えて徒労に終わることが大半だ。今回こそ、ロクサスやハイネという優秀なコーチを得られた。しかし、ルーウェンの戦績は不意打ちで勝ったり雑魚を片付けたり、（全部無傷で乗り切ったが）そんなもんだ。
ルーウェン的には仲間からの援護が受けられて、相手を単なるリア充と侮れるなら楽だ。しかし、ネメシスやしまっちゃうおじさんという敵と一対一で張り合う自信はない。本人に自覚はないが、それらと戦ってルーウェンは充分勝てる力を持っている。
これならルーウェンの力をクレアの方が正しく評価してるという

ものだ。
「大丈夫かぁ～？」
ルーウェンは一抹の不安を感じつつ、博物館に向かった。

博物館　入口

「食うかい？」
「えっと、杏子？」
ルーウェンは覚悟を決めて博物館に特効した。遺書の場所（正直、ガンプラの台座の裏だったか、壁時計の裏だったか曖昧）を確認し、黒いカードを名刺代わりに入口の人に名乗ればいい。しかし、博物館の玄関口で知り合いに捕まった。
赤い髪を黒いリボンでポニーテールにした、青緑のパーカーを着た中学生くらいの少女だ。彼女はルーウェンを見るなり、ポッキーの箱を差し出してきた。本人も一本くわえている。
「杏子、ここにいたのか」
「なんだよ。貨物グミシップの警護をしてここに着いて、クスノキ館長からあんたのこと聞いたから、あたしが師匠として様子を見に来てやったんだ。戦績目覚ましいみたいだね」
彼女は佐倉杏子。ほむらと同じ世界に住む魔法少女だ。ルーウェンは彼女から幻影魔法のデカントアビリティを受けとったのだ。
「ほむらと会った。今この町にいる。漆黒の騎士団のメンバーになった」
「よかったな。あいつも友達ができて」
ルーウェンはほむらと会ったことを告げる。ほむらは親友、鹿目まどか捜索のためにメンバーになった。その際、ほむらはまどか捜索を個人行動として優先させることを条件にした。そのくらい、ほむらはまどかのことが大事なのだ。
「なるほど。そうだ、さっき護送したコンテナがあっちにあるんだ。お前の好きなガンプラってのもあるから、見て行くかい？」

「マジ？　いやー、ガンプラがこっちじゃ入手困難だから助かるよ！」
杏子とルーウェンは同時に港の方を見る。港は連絡船、タイドリップ号がミナモシティに出たり、最近は貨物グミシップの停泊港になっている。貨物グミシップからの貨物コンテナが置かれている場所がその隣にあるのだが、

そこがなんの前触れも無く爆発した。

「なっ……！」
「コンテナが！」
杏子とルーウェンは驚いた。あまりにいきなりなことなので、町はパニックに陥る。
「食い物をっ……！　粗末にしやがって！」
杏子はくわえていたポッキーを噛み締めた。ルーウェンの耳にポッキーが折れる音が届く。杏子はその生い立ちから、食べ物を粗末にすることに憤りを感じたのだ。コンテナには食料が入っていた模様。
「大変です！　武装した連中が潜水艦を奪い、逃走しました！」
爆炎に照らされる二人に、クスノキ館長が駆け寄り伝える。杏子はゆっくり口を開く。
「オイ、ルーウェン。お前のグミシップ、水中行けるかい？」
「行けるぜ」
ルーウェンの答えを聞いた杏子は、ほむらの様に変身した。赤い光に包まれ、それが晴れた時、杏子は赤い衣装をまとい、槍を手にしていた。
「戦闘、開始だな」
師匠の行動を理解していたルーウェンは、グミシップを呼ぶコントローラーを操作した。

カイナシティ浜辺　海の家

「これがサイコソーダアイスか。美味いな」
アクセルは浜辺の海の家でサイコソーダアイスという新製品を食べていた。これはサイコソーダをシャーベットにして、バータイプのアイスにしたのだ。見た目がシーソルトアイスに似ていたので、食べた時は驚いたのだ。
アクセルはアイスを食べ終わり、当たりでないことを確認すると立ち上がる。
海の家を出ると、なにやら騒がしい。観光客の悲鳴だろうか。アクセルがよく見ると、火の玉が空から降っている。空には一匹のモンスター。雰囲気から、ポケモンでないことをアクセルは理解した。赤い体に黒い翼、レッドアリーマーだ。
「わかりやすく腹にタイガーフォースのマーク。やるか」
アクセルは牽制にアイスの棒を投げた。レッドアリーマーはアクセルに気付いて体を向ける。
「ぎぎゃぎゃ！（訳：お前の髪型ダサいな！）」
「俺とやる気か、とでも言いたそうだな」
アクセルはレッドアリーマーの言葉を勝手に翻訳する。実際、間違っていたが、アクセルにわからなくてよかっただろう。もし、アクセルがレッドアリーマーの言葉を理解できたら、レッドアリーマーは即消し炭だからだ。
こうして、赤い両者は向かい合った。

カイナシティ　市場

「オマエノシワザダッタノカ」
「木乃、口調」
到着早々、市場が無残に荒らされてるという惨状を見た木乃は（魚介類が食べられなかったため）怒りに燃え、犯人探しを開始。そ

して、犯人を見つけたのだった。木乃の口調は狂気に満ちていた。一見すると事件の黒幕が犬だったことを知り落胆するような口調だが、声には犯人を銃殺刑にするという意思が滲んでいる。
犯人の正体、それは化け物だった。巨大なピラミッド状の兜を被り、肉屋のエプロンのようなものを着た大男だ。手には巨大な鉈。周りにはゴキブリの様なクリーチャー、ラージローチを従えている。大男のクリーチャーの名はレッドピラミッドシング。ジンがユニバースのデータベースから得ていた情報をまとめた資料に両方共載っていた。
「ならば、変身だ木乃！」
「了解！　誰も見てない！」
木乃はホルスターのビッグカノンを取り出し、天高く突き上げ引き金を引く。
「フローム！　マイコールド！　デッートハーンズ！」
変身ヒロインの台詞としては意味不な言葉を叫び、謎の美少女ガンファイターライダーキノの戦いは幕を開けた。

カイナシティ沖　水中

「待ちやがれ！」
「なんであの潜水艦、グミシップより速いんだ？」
杏子とルーウェンは逃げた潜水艦をグミシップで追っていた。何故か潜水艦の方がグミシップより速く、追跡は難航していた。
「この辺は海流が速いからね。潜水艦には海流突破機能があるけど、グミシップには無いからかな？」
クスノキ館長の説明に、杏子は首を傾げる。よくわかってないらしい。グミシップの運転はルーウェンが行っており、彼は理解出来ている様で、策を練っていた。
「あいつらの行く場所がわかれば、海流のない場所までグミシップは飛んで移動できるんだが」

「ルーウェン君。通信だよ」
クスノキ館長が通信を取る。通信は運転席のモニターに映される。
『グミシップのパイロット、聞こえるか？』
「あ、赤い彗星のシャア？　しかも逆シャア版？」
通信を寄越したのは金髪をオールバックにした赤服の男、シャア・アズナブルだ。リアルアースでも有名なので、ルーウェンは知っていた。
『私を知ってるなら話は早い。今私は君達の後ろにいる。幸い、昔に乗ってた水陸両用のズゴックだ。しかし、こう海流が速くては敵わん。そこで策がある』
「あの赤い彗星の策に協力できるなら光栄だ。どうすればいい？」
『君達のグミシップは形状的に充分海流を切り裂ける。だが、パワー不足だ。私のズゴックはパワーがあるが海流の抵抗をもろに受けている。なら、君達のグミシップで海流の抵抗を消し、私のズゴックがパワーで押す。そうすれば速くなるはずだ』
「なるほど。ズゴックでも抵抗は受けにくいが、流線型であるグミシップの方が海流を受け流し易い。だから、グミシップを壁に、後ろの抵抗がない場所からロスのないパワーで押す。グミシップもエンジンを飛ばすから速くなる、と」
「おい待て、なに話してるのかあたしにはさっぱりだ」
杏子の困惑を放置し、ルーウェンはレーダーでシャアのズゴックがグミシップの後ろに付いたことを確認する。
快進撃の始まりだ。と言わんばかりにルーウェンはエンジンを全開にした。

カイナシティ　浜辺

「おらよ！」
「ぎぎゃぎゃぎゃぎゃ！（訳：髪型の割に繊細な武器だな！）」
カイナシティの浜辺では、青空の下、火の玉とチャクラムが飛び

交っていた。観光客は逃げてしまったのでアクセルは存分にチャクラムを飛ばす。レッドアリーマーは飛びながら、火の玉以外にいろいろなものを吐いていた。
「ちっ、厄介な！　だが、段々と動きが掴めてきた。パターンがあるな！」
アクセルはレッドアリーマーのパターンを掴んでいた。傍目には、パターンなどわからないが、ずっと戦えば理解できるようだ。アクセルはパターンを見つけるにしても、早い方だが。
「だが、隙が出来るのを待つ俺じゃねぇ。一気にカタを付ける！」
アクセルは跳びはね、砂浜に降りる。そして、地面をまさぐった。レッドアリーマーはチャンスと思い、空中からアクセルにダイブする。
しかし、それがアクセルの策なのだ。
「かかったな！　大当りだ！」
アクセルは何かを投げる。それは、先ほど牽制に投げたアイスの棒だ。レッドアリーマーは反射的にそれを避ける。
「そこだ！　燃え尽きろ！」
「ぎゃ？」
右に避けたレッドアリーマー。しかし、アクセルはそれを読んで、左右にチャクラムを投げていた。レッドアリーマーは避ける際、左右に避ける確率が高いとさっきまでの戦いで理解したのだ。
「ぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃー！（訳：こんなダサい髪型の奴に負けるだとー！）」
レッドアリーマーの体にチャクラムが突き刺さる。そして爆発。アクセルは爆炎に背を向けて呟いた。
「記憶したか？　俺、強いだろ？」

カイナシティ　市場

「どーするのよこれー！」

キノは困惑していた。レッドピラミッドシングがいつまでも倒れないからだ。新鮮な魚介類、じゃなくて市場を破壊した犯人は不死身だった。

キノ的に思いつく強力武器をぶっ放したが、レッドピラミッドシングはびくともしない。今しがた、ミニミマシンガンも撃ち尽くしたとこだ。

「ならば！　パンツァーファウスト3！」

キノはポーチからパンツァーファウスト3というロケットランチャーを取り出した。発射の際、後ろに爆炎が飛ばないので狭い部屋からでも撃てる代物だ。

「ファイアー！」

キノは容赦無くそのロケランを放つ。レッドピラミッドシングに命中するも、彼は持ちこたえた。

「次！　ヘカート！」

キノが次に取り出したのはヘカートという対物ライフル。対物、というから戦車やヘリコプターを撃つもので、決して人を撃つものではない。キノはそれをレッドピラミッドシングのボディに向けて乱射。反動が強く、普通のライフルの様に持って使えないはずだが、それをキノは平然と乱射していた。

「嘘っ……！」

レッドピラミッドシングはそれでも、弾丸が貫通することなく膝を付く程度だった。キノは最終手段に出る。ビッグカノンだ。

「ターゲットロックオン！」

「魔物じゃないよ？」

「わかってる！」

キノがビッグカノンのハンマーを上げる。しかしその瞬間、声が響いた。

「その必要はないわ」

声と同時に、レッドピラミッドシングの頭上にタンクローリーが

降ってきた。
「逃げろっ！」
状況を理解したキノは全力ダッシュでその場を離れる。タンクローリーの運転席がレッドピラミッドシングを押し潰すと、後方タンクの重みで運転席も潰れる。そして大爆発。
爆発の後には誰もいなかった。
「死ぬかと思ったー」
「まどかはこの町に来てないわね」
ほむらはいきなりキノの隣に現れた。時間を止めていたのだ。タンクローリーもほむらが投げ込んだようだ。
「少しは周りを見てよね」
「問題ないわ。貴女達ならすぐ逃げれるでしょ？」
エルメスからの非難をほむらは平然といなした。きっとタンクローリーで特効するのに慣れてるんだとキノは思った。
「そうだ！　あいつは？」
「逃げたみたいね」
レッドピラミッドシングは生きているとほむらは告げた。キノは一抹の不安を感じて消し飛んだ市場を見ていた。

海底洞窟　入口

「追い詰めたぞ！」
「海底洞窟の入口を塞いでおいてよかったよ」
潜水艦を奪って逃げた犯人は遂に追い詰められた。犯人は黒いマントの様なものを着た男の様だ。ルーウェン、杏子、シャアの三人が男ににじり寄る。
「私の正体を知りたいか？」
「すっげえ知りたい！　お前絶対様子見に来た黒幕さんだろ！」
男がルーウェンに聞くと、ルーウェンは興奮気味に答えた。男は

やれやれと言わんばかりにマントを脱ぐ。
「君の予想通り、私がタイガーフォースのリーダー。名前は……、＊（アスタリスク）とでも名乗っておこう」
そう言ったタイガーフォースリーダー、＊の姿は荘厳そのものだった。
全身を白銀の鎧で包み、顔も隠している。鎧の布地は黒なので、コントラストがよく映える。
「結局顔見えねーじゃん」
「君も過去を捨てたのか。奇遇だな、私もだよ」
杏子が辛辣な言葉を、シャアが共感の声を投げかける。対してルーウェンは二人とベクトルの違う反応を見せた。
「すげっー！　ラスボスらしいな第一形態から！　カッコイイ！」
「君は見る目があるようだね。私はまだ3回の変身を残しているが、それは終盤のお楽しみだ」
ルーウェンと＊は気が合いそうだ。その分では、タイガーフォースという組織名の由来がトラウマを変換した虎馬、つまりタイガーホースの鈍りからきてることも理解してるだろうと＊は思った。
「私の手には現在、煌炎、水龍、天光、常闇、命樹のリングがある。君には震土がある。八元素のリングは我々の目的に必要なのだ。譲ってくれないか？　もちろんただではないさ。リアルアースも復活出来るし、君の欲しいものはなんでもやる」
＊はルーウェン達に交渉を持ち掛けた。＊はどうやら、リアルアースを直す方法を知っているらしい。ルーウェンは少し考えて言った。
「お前、リアルアースとかが崩壊した理由がわかるのか？　少し気になっていたところだ」
「ああ、それか。ポートランドは部下が天光と常闇のリングを手に入れる際、同時に取らねばならんのをしくじったから保護機能が働いて崩壊した。もう片方の行方をくらますシステムだった。その他は……、世界からエネルギーを生み出す新型の発電所を開発した

のだが、それを資金調度のため世界の政治機関売った。案の定、彼らは扱い切れずに世界を保つエネルギーまで吸い上げたさ。特にリアルアースの日本の都知事はアホでね。リアルアースは一度、どうしても崩壊させる必要があったから調度いい」
＊はルーウェンの質問に答える。ルーウェンが答えをメモしてると、退屈そうな声が聞こえた。
「＊……。喋り過ぎだ。まったく、人には話が長いという割に、自分が一番長いじゃないか」
「すまないクレア。待たせたね。出番だ」
砂地の地面に、クレアはふわりと降り立った。洞窟の天井に彼女は潜んでいたのだ。白い騎士装は＊と並ぶに相応しい。
クレアは＊の隣に立ち、リングを見せる。
「それは、薫風のリング！」
クスノキ館長が驚く、クレアが手にしてるリングは薫風のリングだ。右中指のリングが命樹のようだ。薫風のリングは館長室に置いてあったのだ。恐らく、逃げ出す前に持ち去ったのだろう。爆破事件の犯人がこの二人なら、片方が爆破し片方がリングを入手、その後合流なんてことも可能だ。
「命樹を中指にしてるわけか？　これは君との決闘の誓いだ。いわば、婚約指輪みたいなものだ」
「いや、聞いてねぇ」
＊の時と打って変わり、ルーウェンは冷たくツッコミを入れる。クレアは薫風のリングを口元に持っていく。そして、薄い桃色の、桜の様に艶っぽい唇でリングに口づけし、ルーウェンに言う。
「これは君がする誓いだ、ルーウェン・ヴァイサス。この薫風のリングは預ける。私がこれを奪う時は必ず君からだ」
クレアはルーウェンにリングを投げる。ルーウェンはリングを掴み、クレアを見る。ルーウェンには、この可憐な少女が戦いに囚われた修羅だとは思えなかった。しかし、充分に生きてる充実感は伝わる。

「ありがとう。俺、少し悩んでたんだと思う。戦いに、命の奪い合いに快感を得てた自分に。死ぬかもしれないってことは、今は生きてるってことなんだな。共感できる奴がいてよかった、ひとりぼっちは寂しいもんな」

「礼はいい。それより、フラれた件は大丈夫か？　私は君と、万全な状態で戦いたい」

いい雰囲気の二人に、杏子達は釈然としない気分でいた。なんで敵と仲良くなるねん、とでも言いたいのか。

「あたしの台詞とりやがった……！　会心の名台詞、ひとりぼっちは寂しいもんな、が！」

台詞をルーウェンに取られた杏子が歯ぎしりし、かつて命懸けで戦った敵と共闘した経験を持つシャアは感慨深げに呟く。

「敵と味方は二極ではない。状況が変われば敵が味方に、味方が敵になる時代だ」

そしてクスノキ館長が納得できないと呟く。

「あの、これってわざわざここでやる必要ありました？」

5．ひとりぼっちは寂しいもんな（後書き）

解説

レッドアリーマー
魔界村に登場する敵。追尾能力が高く、多くのプレイヤーにトラウマを刻んだ。よく間違えられる（実際間違えた）が、レッドアーリマーではない。

レッドピラミッドシング
サイレントヒルに登場するクリーチャー。通称、△様。再登場の兆しあり。劇中通りの不死身である。

ラージローチ
ゴキブリのクリーチャー。レッドピラミッドシングはサイレントヒルでもゴキブリを従えてるようなので、バイオハザードから出ていただいた。

シャア・アズナブル
お馴染み赤い彗星。説明不要だが、『逆襲のシャア』バージョンで出てくれた。

6．それぞれの懐古（前書き）

世界政府とは？

数多の世界を統べる政府。最近腐敗してる。

司法、立法、行政の三つはそれぞれ別の世界にあり、ポートランドに立法機関があるようだ。

6．それぞれの懐古

トワイライトタウン　屋敷

「我々は現在、震土、薫風のリングを所有している」

屋敷の会議室で、シャアは一人呟いた。司令系統の人数が少ない漆黒の騎士団に、戦術参謀として加入したのだ。彼とて一年戦争を初めとする大戦を潜り抜けた軍人。モビルスーツと人では意外に（地上戦の場合）戦術は変わらないもので、シャアが適任とルーウェンが考えたのだ。

「八元素のリングとしては圧倒的不利な状況だが、これまでの戦績は悪くない。数ではタイガーフォースとやらが上だが、戦力では上回っているか」

シャアは資料を見て状況を把握した。数で劣りこそすれ、一人ひとりの実力はこちらが上。まるでホワイトベースかアーガマだと思えた。

「ここまで数が少ないと、一人の価値が大きい。とりあえず、データベースを見て彼らの経歴を調べよう」

シャアは端末を操作した。

ジンの部屋

「熱、下がらないね」

「う、うう……」

ジンは部屋で寝ていた。冷えピタでは瞬時に冷たさが奪われるので、ドライアイスを袋にいれて額に当てている。枕も冷蔵庫に入れて冷たくするやつだ。

羽川はジンが脇に挟んでいた体温計を見て言った。下がらないと言ったが、測定不能なのでもしかしたら上がってるかもしれない。

ジンの体は冬のストーブみたいに熱かった。ジン的には、サイクロプスの目がある人間はこんな高熱が出るのか、と生まれて初めての苦しみを味わっていた。

「う、ジン……」

「そういえば、ジンって恩人の名前だったね」

羽川は看病してる間にジンに聞いた昔を思い出した。

ジン（当時はメアリーと呼ばれていた）は、初代ジン・クレッシェンドに拾われた。それ以前の記憶は無く、荒涼とした大地にやたらぶかぶかの服を着て座り込んでいたのが最古の記憶だそうだ。

その後は町を点々とし、サイクロプスの目が原因で迫害されると気づいた頃にはボロボロでバス停のベンチに寝ていた。そこで、初代ジンに出会ったのだ。

しばらくは幸せに過ごしていたが、事故で初代ジンが死に、その際サイクロプスの目も露見してしまったのだ。そこから、住んでいた場所を追い出され、ポートランドのユニバースで働くようになった。

そんな辛い過去を持つが故、ジンはそれを思い出したり、サイクロプスの目のことを考えて辛くならないように、過去を振り切るように戦い続けるのだ。一日中休むのも久しぶりらしい。

「でも熱、下がらないのね」

羽川はジンの寝顔を見ながら心配そうに呟いた。

トワイライトタウン　森

「これまで殺した累計は３２人か。名前を覚えてるのはバンの甘ちゃん野郎だけだな」

「なんだそりゃ？　いちいち殺した人数数えるのか？」

トワイライトタウンのトラム広場にある壁、そこは一部欠けてい

る。そこから森に行け、漆黒の騎士団本部の屋敷にもそこからいく。ルーウェンは杏子と久々に鍛錬をしていた。杏子曰く、ルーウェンは圧倒的に経験不足なのが弱点だそうだ。そこで、模擬戦を行い戦闘経験を積むのだ。ルーウェンは前に杏子と会った時より強くなっていた。

今は休憩がてら高い木の枝に二人して座っていた。

「なあ、お前フラれたんだって？」

「う……、クレアめ」

杏子がフラれた話をふる。クレアがサラっと言ってしまったのだ。ルーウェンは口惜しそうに言った。

「いいんだよ。今は違う人好きなんだから。年上過ぎだけど」

「ヨヨだろ」

「……」

「図星か」

杏子は一発で言い当てた。大方、フラれて落ち込んでいたところ励まされて好きになったといったとこだろう。

「なんか行動に移したのか？　無行動で告白して失敗したんだろう？」

「ああ、すでにバイクの二人乗りはした」

ルーウェンはサラマンダーというブランド物バイクを持っている。サラマンダーはオンロード最速のバイクだそうだ。

「そういえばお前、リアルアースってのに帰るつもりなのか？」

「最初はそのつもりだったが、今じゃこっちの方がいいな。帰らん」

ルーウェンはリアルアースに帰るつもりはないと宣言した。リアルアースにさして思い入れがあるわけではないらしく、こっちの方がいいらしい。

「それに、リアルアースが復活する保証はないからな」

「ふぅん。じゃ、その『断罪のリング』ってのはなんだ？」

杏子はここぞとばかりに質問責めをする。漆黒の騎士団に入った

わけではなく、明日には貨物グミシップの護衛に戻るからだろう。
「これか？　これはな、昔貰ったんだ。そういえばこっちの世界、前に行ったことあるんだよな」
「どういうことだオイ。リアルアースってのは簡単に出れるもんじゃないだろ」
「なにか特別なものを使ったらしい。小学生の頃、学校の図書室で本を読んでたんだ。そしたら本が光って、こっちの世界、トワイライトタウンじゃないにせよ来れた。今までは保健室で目が覚めたのもあって、寝オチした夢だと思ってたが、よく考えればリアルアースの外に出れるアイテムだったのかもな、その本。夢で貰った指輪が現実にあるわけないし」
ルーウェンは右手の指輪を見て言った。断罪のリング、その力は依然知れない。だが、何らかの力はあるはず。
「そういえば最近、世界政府が腐敗とか騒いでいたな。リアルアースが崩壊してから二ヶ月、なんの動きもないのは、政府が政局ってのに必死だったからとか。政局ってなんだ？　食い物じゃないのが腐るのか？」
「政局ってのは、選挙とかどこが与党になるとかってやつだ。政治腐敗ってのは、まあ、政治家が違法に金貰って、悪代官と越後屋みたいなやつだ」
なるほど、とルーウェンの説明で杏子は理解したようだ。かつて羽川も政府について言及していた。しまっちゃうおじさんも政府との関係を明かしている。しまっちゃうおじさんはタイガーフォースの一員だったはず。なら、タイガーフォースと政府は何らかの繋がりがあるとルーウェンは考えていた。
「タイガーフォースはまだ謎があるな……」
「そうだな。ま、あたしは難しいこと考えんの苦手だから、ぶっ飛ばすだけだがな」
杏子は空を見据えて言った。

学園都市　とある病院

ここは科学技術が発展し、人口の八割が学生という特殊な町、学園都市。この町は学生に能力開発という、超能力のカリキュラムを組ませている。このカリキュラムにより、学生は個々により性質や強弱様々な超能力を有するのだ。

しかし、この町の学生でない人間が、能力開発を受けていた。

「うむ、この能力ならあの快楽殺人鬼に勝てる！」

能力の測定を終えて測定室から出てきたのはバン・グローリーだった。ルーウェンが殺したはずだが、生きていたみたいだ。この病院の医者がカエル顔に似合わず名医だったからだ。しかも、患者に必要なものは何でも用意するという信念と、学園都市理事長へのコネにより能力開発も受けてしまった。

ルーウェンにとってはピンチだが、能力開発が上手くいかなければ大丈夫だ。だが、その能力開発が大成功したから問題なのだ。

「レベル5、つまり最高ランク。この力があれば！」

バンは両手を眺めて廊下を歩いていた。彼の目的はただ一つ。リアルアースに帰ることだ。

彼はアニメがほとんど放映されないリアルアース日本国静岡県で育ったせいか、体育会系でありアニメを見るのは弱さの証明と考えていた。外で動き回ることこそ己を強くすることだと教わったのだ。

バンは受験生だが、すでに特待の誘いが来ている。競技は水泳。将来はオリンピックで金メダルもと言われた記録を持ち、彼の将来は輝いていた。それなのに、リアルアースが崩壊して将来は失われた。バンはなんとしても、リアルアースに戻らねばならない。

タイガーフォースには集団で志願した。周囲でどうしてもリアルアースに戻らねばならない仲間を募ったのだ。数に押されたのか＊も快くタイガーフォースに加入を許した。少し予定はズレたが、バンの未来は軌道修正されたかに思えた。

その矢先、ルーウェン・ヴァイサスの登場である。ルーウェンは

容赦なくバンの仲間を虐殺し、リアルアースに帰りたくないという怠惰な理由でバンと仲間達の未来を奪ったのだ。
「ふむ、能力を得て調子づくのはよいが、力を持つことは相当な覚悟を要するのだ」
廊下を歩いていたバンにクレアが声をかける。窓を開け、サッシに腰をかけている。病院に吹き込む風が彼女の髪を撫でる。
「覚悟、だと？」
「大きな力ほど、使い方を誤れば悲劇を産む。もともと、そんな力のないルーウェンや私には無縁だがな」
「ルーウェンは力の使い方を間違えてる。なぜその力をリアルアース復活という当たり前の目的に使わないんだ！」
「お前にとっては当たり前でも、ルーウェンにとっては違う。彼はこっちの世界の方が好きみたいだからな」
バンはリアルアース復活に協力することが当たり前だと考えていた。しかし、リアルアースに帰りたくない人間もいることをクレアは知っている。

リアルアースの住人には、封印がかけられていた。リアルアースの特殊な一面だ。
しかし、リアルアースの崩壊で封印は失われた。封印が解ければ姿も名前も能力も、全てが本来のものとなる。それが今のクレアやバン、ルーウェンなのだ。
リアルアースでのクレアは病弱な少女だった。ゲームの中の屈強な戦士に憧れても、入退院を繰り返す生活ではトレーニング一つできない有様だ。だが、リアルアースが崩壊して自分の封印が解けると、病気一つしないどころか戦士もかくやという身体能力を得た。リアルアースに帰ればまた病院生活だ。クレアも本心では帰りたくない、リアルアースの復活は望んでいなかった。
「それではダメだ！　俺達が生きるべき本当の世界は、リアルアースなんだ！　そこから逃げたらダメなんだ！」

「貴様には一生わからん。病室から出ることなく、なにも出来ず、一生命をだらだらと伸ばすだけの、人間の気持ちが！」
クレアは珍しく語気を強めた。バンはリアルアースへの回帰を望んでいるが、あまりにリアルを知らない。知らな過ぎる。恐らく彼は、ルーウェンやクレアの様な人間の気持ちを理解せず、リアルアースが復活したらしたで、独善的な感情を持ってリアルアース住人全員を探して帰らせるだろう。そんな馬鹿な真似を、やる奴なのだ。バン・グローリーは。
「ルーウェンがお前に言ったそうだな。『お前を殺さないと誰かが悲しむ気がする』と。それは正しいみたいだ」
クレアはそれだけ言うと、病院の窓からいなくなった。バンは大馬鹿野郎なので、クレアの気持ちには微塵も気づいていなかった。

行政機関　ホールシティ

ポートランドとは別の世界に、世界政府の行政機関は存在する。ポートランドにあるのは貿易の施設や三権分立でいうとこの立法機関だ。司法機関はまた、別の世界にある。それぞれワープホールで繋がってるとはいえ、多少面倒に感じる議員や役人がいるのも事実だ。
「かなり非効率的ですね。まるで要塞のようだ」
「すいません。7年ほど前のサイクロプスによる襲撃事件により、一時世界政府の中枢が機能しなくなったためです。そこで司法、立法、行政の三権を世界ごとに分けることとしたのです」
無駄に豪華な廊下を歩くのは白い鎧の＊。その隣にへつらってる政治家は面倒な世界政府の仕組みのわけを説明した。
「ふむ、だいたい理解した。『サイクロプスの目』とは、その『サイクロプス』という組織に属する者の印と。たしか、そう最初におっしゃいましたよね？」
「はいそうです。取り分け、ジンという娘は目を持ち、容姿が首

謀者、メアリー・ブロードに似てるため、我々ではそやつの血縁者と考えています。メアリーの妹か娘かはハッキリしませんが、サイクロプスの少ない残党や新たにメアリーに感化された人間がジンを押し立て、再び我々に刃向かったら大変です」

＊は説明を聞きながら昔を思った。彼はかつて、世界政府直属の兵士だった。メアリーもまた、＊の同僚だったが、ある事情により世界政府に反旗を翻したのだ。

「メアリー・ブロード。なぜ君はあんなことを？　そういえば、ジンが拾った子供に彼女の名前をつけていたのは、あの娘がメアリーに似てるからだったね」

＊の言うジンとは、初代ジンのことである。メアリーが世界政府に反抗し敗れた後、初代ジンと＊は一度面識がある。その際に初代ジンが話していたのだ。ルーウェンが初代ジンにそっくりで、＊も一瞬驚いたことはクレアにも黙ってるが。

「何でも、そのサイクロプスの乱を平定したのはタイガーフォースを率いた貴方とか。世界中の荒くれ者を束ねる貴方の腕は聞いております」

「よしてくれ。荒くれ者ほど乗せやすい奴はいない。寧ろ、臆病者や怠け者を束ねる方が私には難儀だ」

「またまたご謙遜を……」

＊はその議員の態度を見て、かつてメアリーと話したことを思い出した。

『世界政府は腐っている』

長い茶髪をなびかせたメアリー・ブロードは金色の瞳で＊を見つめて言った。

『そんなことくらいわかっているさ。だから私は、内部から世界政府を変革する』

『甘い！　腐った連中がそんなので変わるのか！　私には共に戦う仲間がいる。自分の手を血で汚さなきゃ、何も守れない！』

メアリーが吐き捨てた。メアリーはこの話をする前日、世界政府

の無茶な開拓作戦で自分の部下を全て失ったのだ。
『君が道を踏み外せば、死んだ部下も悲しむ』
『黙れ！　私の気持ちなんかわからないくせに！　私は奴のとこへ行く、ジンのところに』
メアリーはそう言って＊のもとを去った。＊が自らメアリーを倒した時、自分のやり方で世界政府を正すと彼女に誓った。
今も廊下で堂々と賄賂が行われている。そんな世界政府は変わらねばならない。
（待っていてくれメアリー。私は世界政府を正す。自分のやり方で！）
＊は強い意思で、豪華な絨毯の敷かれた廊下を踏み出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6486x/

幻界戦線フロントワールド

2011年11月20日20時26分発行